モノグラフ・高校生'88

vol.25 推薦入学に対する高校生の意見

上智大学教授	武内　清
東京都立上野高校教諭	蒲生真紗雄
桜美林高校教諭	尾澤弘恒
東京大学大学院生	大野道夫
上智大学大学院生	三宅聖子

目次

はじめに……2
本報告書の要約……3

第Ⅰ章　調査の意図と調査対象者の特性……武内　清…6
　1．調査の意図と方法……6
　2．調査対象者のプロフィール……9

第Ⅱ章　大学入試への高校生の意見……蒲生真紗雄…10
　1．大学受験の状況……10
　2．生徒の望む入試制度とは……12
　3．推薦入学についての意見……19

第Ⅲ章　推薦入試への応募プロセス……尾澤弘恒…22
　1．推薦入試への応募状況……22
　2．推薦入試への応募時期……25
　3．推薦入試応募の動機……28

第Ⅳ章　推薦入学と生徒の特性……大野道夫…30
　1．推薦応募者はどんな生徒か……30
　2．推薦応募者の自我像……33
　3．推薦応募者の将来像……39

第Ⅴ章　推薦入学の高校教育への影響……三宅聖子…41
　1．推薦入学の高校生活への影響……42
　2．推薦入学のための対策……47
　3．推薦入学決定後のすごし方……48

付論　推薦入学に対する大学生の意見……武内　清…52
まとめにかえて……56

資料1　調査票見本……57
資料2　基礎集計表……72

●はじめに

18歳人口の減少をあと数年後にひかえ、各大学は、大学教育の見直しや入試方法の再検討をはかっている。とりわけ私立大学は、大学の存続にかかわるだけに真剣にならざるを得ない。そういう中にあって、ここ数年盛んになっている推薦入学制度についても、各大学は独自のデータの分析を行って、今後のあり方を検討している。

入試方法については、とかく大学側の都合で決められることが多い。しかし、顧客である高校生自身は、今の入試方法や推薦入学制度についてどのような考えを持っているのであろうか。大学にとっていかに都合のよい方法であっても、高校教育のあり方にゆがみを生じさせていたり、高校生の生活に暗い影を投げかけていたりしては、大学の社会的責任が問われよう。

本調査は、大学入試が終わったばかりの高校3年生約3,000名に、大学入試、推薦入学について意見を求めたものである。どのような思いをして、入試をくぐり抜けてきたかの息遣いが伝わってくるようなデータが得られた。調査にご協力いただいた生徒諸君、先生方に心よりお礼申し上げる。

分析・執筆は、5名の協同によるものであるが、深谷昌志放送大学教授、明石要一千葉大学助教授はじめ高校教育研究会のメンバーの方々には、調査の実施から分析まで多くのご教示をいただいた。また、福武書店教育研究所の加藤智禧所長、島内行夫氏、宮本早余子氏、藤本かずみ氏の全面的ご協力に深く感謝したい。

昭和63年10月

武内　清　　尾澤弘恒
蒲生真紗雄　　大野道夫
三宅聖子

本報告書の要約

第Ⅰ章　調査の意図と調査対象者の特性

①　本調査は、現在大学入学者選抜の方法として定着しつつある推薦入学制度について、高校生に意見を求めたものである。

②　調査対象は、全国15の普通科の高校(公立12、私立３)の高校３年生2,940名である。有効回答数1,020名(回収率34.7%)で、男子500名(49.0%)、女子514名(50.4%)である。

③　調査時期は、1988年(昭和63年)３月。調査方法は郵送法(一部集団記入法)である。

第Ⅱ章　大学入試への高校生の意見

①　今回の調査対象者の中で、大学・短大を受験した者(推薦を含む)は、89.4%にのぼる。性別では、男子95.4%、女子83.7%と、男子に多い。

②　国公立(共通一次)受験者は、36.1%(男子48.2%、女子22.8%)と、約３分の１強である。国公立受験者はＡランク校の男子(76.0%)に多く、Ｃランク校の女子(2.1%)に少ない。

③　高校３年生の３月末の時点での決まっている進路は、国公立４年制11.4%、私立４年制26.4%、短大15.2%、各種・専修7.5%、就職・家事2.4%、浪人24.1%で、まだ決まっていない10.8%である。浪人は男子の40.8%、女子の7.8%である。

④　高校生の大多数が望むような入試方法はない。比較的希望の多いのは「調査書と入学試験で合否を決める」(41.0%)という、現在の公立の高校入試のような方法である。次いで「１科目でもよい点を取った者を合格させる」も３分の１の生徒(36.3%)が望んでいる。女子や推薦合格者は「調査書と面接で合否を決める」の賛成率が比較的高い。

⑤　「全員合格」(23.5%)、「面接だけ」

(14.5%)、「調査書だけ」(6.9%)、「くじ引き」(4.4%)という方法は、あまり人気がない。

⑥ 学力以外の能力を評価すべきという意見を高校生は持っている。しかし選抜は公正に行われるべきという意見を持ち、優先入学(特定のタイプの生徒の入学を有利にする)に対しては批判的である。

⑦ 国公立入試に対しては、「入試制度がたびたび変更されるのは困る」(83.0%)、「共通一次の得点は受験生に知らせるべきだ」(79.9%)、「足切りはすべきでない」(57.4%)と改善要求は強い。

⑧ 生徒たちは、推薦入学制度には賛成(やめてほしい13.9%)で、国公立も私立大も大幅ではないが、もっと推薦入学をふやしてほしいと望んでいる。「指定校制度はやめてほしい」は、4分の1(27.3%)程度いる。

⑨ また推薦入試に望むこととして、「部活動、学校行事での活動も評価してほしい」(61.1%)、「大学入学後の追跡調査はしてほしくない」(58.2%)、「指定校で学校推薦されたら必ず合格させてほしい」(50.8%)とも望んでいる。

第Ⅲ章　推薦入試への応募プロセス

① 推薦入試に応募した者は、27.2%と、4人に1人の割合となっている。そのうち約3分の2が合格している。結局、推薦で大学・短大に入学した者は全体の2割(19.0%)いる。その内訳は、指定校推薦11.0%(男子8.8%、女子13.5%)、一般推薦8.0%(男子2.1%、女子14.7%)である。

② 成績上位の生徒は、推薦に応募する率が高い。とりわけ指定校推薦で顕著である。一般推薦は成績の中位者まで及んでいる。

③ 推薦入試を知ったのは高1の時、応募しようと決意したのは、高3夏休み以降が多い。

④ 推薦に応募の理由(動機)は、大学側が条件にあげる「第一志望だから」(41.8%)というだけでなく、「早めに合格が決まれば安心できるから」(51.5%)や「一般入試より入りやすいから」(43.3%)という消極的なものも多い。成績上位者は「第一志望」を、成績下位者は「入りやすさ」を理由にあげる率が高い。

第Ⅳ章　推薦入学と生徒の特性

① 推薦入学応募者は、「ふだんから勉強するこつこつ型」(46.4%)、「運動部」(54.6%)や「生徒会」(45.7%)で活躍する生徒、とクラスメートから評価されている。

② しかし一方、推薦応募者は、「先生に気に入られている生徒」(48.5%)、「わりと気が弱い生徒」(35.9%)、「英語の不得意な生徒」(「得意」は15.7%のみ)とみられている。

③ 推薦合格者は、自分ないし推薦仲間を肯定的に評価するのに対し、それ以外の者は、推薦生の特性をあまりよいものと評価していない。

④ 指定校合格者は、一発勝負にも人との競争にも強いという自信にみちた自我像を持ち、推薦不合格者は、その両方に自信をなくしている。

⑤ 推薦合格者は「規則やルールはよく守る」と規範に対して従順であるが、ホンネとタテマエを使い分ける傾向も強い(特に指定校推薦者)。

⑥ 指定校推薦合格者は、アイデンティティの危機(自分の生き方に疑問を感じる、悩んで眠れなかったことがある)の体験が少なく、将来像も楽天的で危機感がない。

第Ⅴ章　推薦入学の高校教育への影響

① 推薦入学によって、「ふだんからよく勉強するようになる」(68.8%)、「第一志望

で大学・短大に入る生徒がふえる」(61.7%)と、生徒たちは推薦入学を肯定的に評価している。

② 一方、「クラブ・部活動に推薦を意識して参加」(51.8%)、「ほどほどの大学を望む」(49.8%)、「のんびりし、緊張感が薄れる」(47.3%)、「先生に従順になる」(43.0%)と、推薦入学の悪影響を心配する声もかなりある。

③ 推薦合格者は、推薦入学が高校生活に良い影響を与えていると感じ、推薦に不合格あるいは応募しなかった者は、悪い影響を強く感じている。

④ 推薦入学への対策として、「ふだんの勉強や定期試験に真剣にとりくんだ」(59.7%)生徒が多い。そして女子は「遅刻や欠席をしないようにした」(55.2%)が加わる。成績下位者には、クラブ・部活動を一生懸命やった者がみられる。

⑤ 推薦入学決定後のすごし方として「のんびりすごした」(84.8%)、「趣味やスポーツを楽しんだ」(79.7%)と、一般入試受験生がうらやむ生活を送る者が多い。そして男子は「自動車教習所に通った」(66.7%)、「遊びまわった」(52.9%)、「アルバイトをした」(47.1%)と校外での活動も頻繁である。女子は、「いろいろな本を読んだ」(71.9%)と、入学決定後も落ちついた生活を送っている。

⑥ 大学生活に向けて勉強する生徒も3割程度いる(英語を勉強32.6%、専攻分野の勉強31.4%、大学からの課題を勉強12.8%)。

⑦ 推薦入学で大学に入る直前の今の気持ちは、「進学先に満足」が9割近く(指定校90.0%、一般推薦81.9%)いて、「ふだんの努力がむくわれて満足」も6割(指定校71.0%、一般推薦51.4%)と、推薦で入学する生徒の満足度は高い。一方、「大学の授業についていけるか心配」(55.3%)、「受験勉強から逃げたようなひけめを感じる」(48.3%)という不安もみられる。

推薦入学は、大学入学の方法の一つとしてすでに定着し、高校生は比較的肯定的にとらえている。しかしさまざまな影響を高校教育に与えている。

〔調査概要〕

対　　象●全国15の普通科の高校の3年生
サンプル数●2,940名(有効回答数1,020名、男子500名;女子514名)
調査時期●1988年3月
調査方法●郵送法(一部集団記入法)

第Ⅰ章 調査の意図と調査対象者の特性

1．調査の意図と方法

(1) 推薦入学をめぐる動向

文部省の「大学入学者選抜実施要項」（昭和42年）で公認された推薦入学制度は、最近ますます拡大の方向にある。

昭和62年度は、大学入学志願者の３人に１人が推薦入試に挑戦し、短大入学志願者の４人に３人までが推薦入試を受けている。その結果、昭和62年度の大学・短大入学者の５人に１人（20.5%）は、推薦入試による入学者となっている（「推薦入学カタログ63年度版」リクルート出版）。

画一的大学入試の弊害が多く指摘される中にあって、推薦入学は、受験化社会の一服の清涼剤として、肯定的に評価されることが多い。大学にとっても、受験競争で傷ついていない第一志望の意欲的な学生を早期に（推薦入試は高３の11月～１月頃行うところが多い）確保できるというメリットがあるし、高校生にとっても、日頃の勉学やクラブ活動の努力が評価される点で好評である。一方、高校側も推薦に向けて着実な進路指導ができ、一定の進路実績が保障されるので歓迎する声が高い。親にとっても、子どもが浪人せずに希望する大学に入ってくれることを望まないわけはない。

このように、いいことづくめの推薦入学制度であるが、はたして問題性はないのであろうか。これまで、問題性の指摘は大きく三つのところからなされてきている。

一つは高校側から。成績の上位の生徒が一発勝負の一般入試を嫌い、安全性の高い推薦入試に応募してしまうことの影響である。そのような生徒たちは、大学の決まった11月以降のんびりしてしまい、これから受験の最後の追い込みというクラスの雰囲気に水をさし、教師の受験指導が一向に効を奏さないといういらだちが表明されている(「専修・各種学校入学者増加メカニズムの高校格差別分析」国立教育研究所紀要112集、昭和61年)。

もう一つは、大学側から。推薦入学生は高校の成績評点値が高いにもかかわらず（B段階以上、私立大37%、私立短大25%)、大学入学後の成績を追跡してみると、必ずしも思わしくはない。また何事に対しても意欲の低い生徒が含まれているという評価（とりわけ男子の推薦入学生にこの傾向があるといわれる)、そのような生徒を推薦してくる高校への不信感も生まれている。

さらに、図Ⅰ－1に示されているように、大学の入学難易度と推薦入学のタイプとの間には、一定の関係があり、難易度の高い大学ほど推薦制を実施せず、実施しても指定校制をとっている。以上の点も、推薦入試について考える時、考慮に入れなければならないことである。

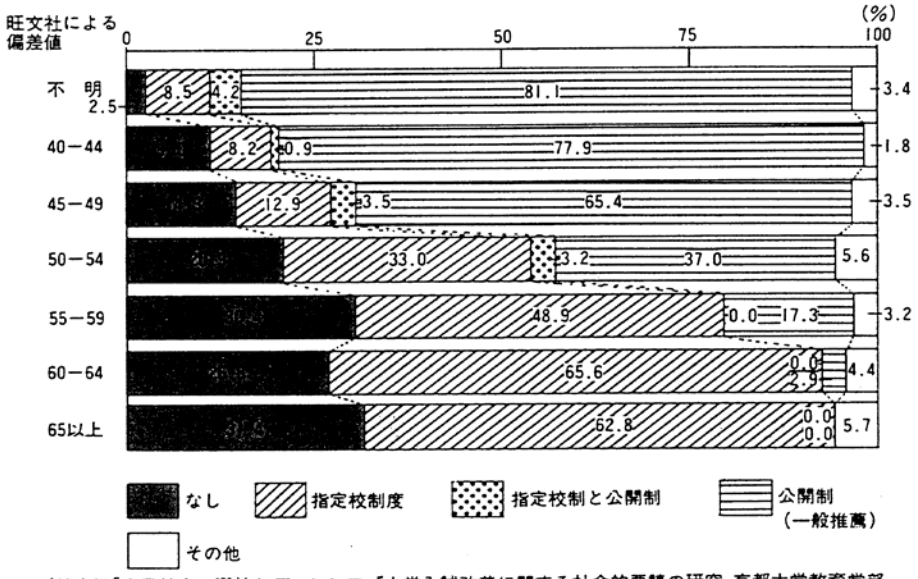
一方、当の高校生自身は、推薦入学についてどのような意見を持っているのか。その点の解明がこれまでほとんどなされていない。本調査は入試の一段落した高校3年3月の時点（卒業式前後）に、高校生自身に、入試のこと、推薦入学のことなどをたずねたものである。当事者の高校生自身が必ずしも全体的把握ができるというわけではないが、推薦入学の今後を考える上で、重要な参考意見となるものと思われる。

(2) 調査内容

調査内容は、おおよそ次のような5つからなる。

Ⅰ生徒の属性――3 6 7 8 25
Ⅱ大学の入試についての意見――10～14
Ⅲ推薦入試への応募――9 17～21
Ⅳ自我像、将来像、生徒のタイプ――4 5 15
Ⅴ推薦入学の高校生活への影響――16 22～24
（巻末の調査票参照）

図Ⅰ－1　大学難易度と推薦入学のタイプ



（竹内洋「産業社会の選抜とディレンマ」「大学入試改善に関する社会的要請の研究」京都大学教育学部入試検討委員会 1987、92ページより引用）

データの分析は、この順序で行う。

(3) 調査対象および方法

調査対象は、1都6県の15の高校(普通科)の、高校3年生2,940名である。

高校3年の2～3月の時期に、学校を通して調査票を配布してもらい、回収は各個人ごとの郵送法によった（一部は、学校ごとの回収)。回収数（有効数）は1,020票で、回収率は34.7%である。

(4) 調査対象校の特質

調査対象校の特質を示したのが表Ⅰ－1である。

今回のテーマが推薦入学のため、対象校は普通科進学校が中心になっている。

高校格差（ランク）は、卒業後の進路、共通一次受験者比率、中学の成績等を指標にして、A(高い－5校)、B(中位－6校)、C(低い－4校）の3つに分けた。表に示されているようにＡＢＣの差はわずかであり、すべて大学・短大進学率7割以上の進学校である。

表Ⅰ－1　調査対象校の特質

(%)

ランク	学校番号	設置別	共学・別学	都道府県	中学時代の成績(中の上以上)	大学・短大受験率	共通一次受験率	4年制大学進学率(カッコ内浪人含む)	短大進学率	各種専修就職	推薦入学者の割合(カッコ内推薦応募者)	サンプル数(人)
A	A1	公	男子	宮城	95.8	97.9	89.4	39.6(81.3)	0.0	2.1	0.0(2.3)	48
	A2	公	女子	宮城	100.0	97.2	65.7	61.1(77.8)	8.3	2.8	14.7(35.3)	36
	A3	公	共学	神奈川	93.0	89.1	49.1	51.5(59.3)	2.3	1.6	25.0(28.7)	128
	A4	公	共学	東京	97.0	94.1	56.3	32.3(85.2)	2.9	5.9	3.1(12.5)	34
	A5	公	共学	福岡	95.3	89.4	59.2	52.9(61.1)	15.3	11.8	17.6(20.3)	85
B	B1	私	男子	東京	97.2	98.6	31.9	60.0(100.0)	0.0	0.0	29.0(30.6)	70
	B2	公	共学	岡山	86.0	93.8	56.7	54.7(62.5)	20.3	6.3	17.8(35.7)	64
	B3	公	共学	東京	94.3	100.0	57.2	34.3(82.9)	8.6	2.9	17.6(23.5)	35
	B4	公	共学	岡山	78.1	96.9	45.2	43.8(53.2)	21.9	6.3	14.2(49.9)	32
	B5	公	男子	埼玉	95.1	96.5	17.7	33.3(95.0)	0.0	2.8	14.0(16.5)	141
	B6	公	共学	東京	93.3	93.2	36.2	33.8(56.8)	13.5	2.7	8.1(30.7)	74
C	C1	公	共学	神奈川	65.2	80.4	5.4	21.7(36.1)	32.6	17.4	25.0(55.6)	46
	C2	公	女子	埼玉	100.0	81.6	9.7	21.1(42.2)	31.6	23.7	17.2(27.5)	38
	C3	私	女子	東京	36.3	71.1	1.0	10.3(17.7)	37.8	31.1	32.5(49.9)	135
	C4	私	女子	新潟	78.4	82.4	0.0	29.4(33.3)	43.1	19.6	54.8(78.6)	51

2．調査対象者のプロフィール

今回、回答を寄せた生徒の基本的属性は以下のとおりである。(総数1,020名、数字はパーセント、不明は省略)。

(1) 学年　高校3年生　100.0

(2) 性別

男　子	女　子
49.0	50.4

(3) 自由参加の部活動(高2のとき)

運動部で熱心	運動部で熱心でない	文化部で熱心	文化部で熱心でない	以前に参加	非参加
29.1	9.0	20.2	13.3	14.2	12.0

(4) 高3の時の成績

上	中の上	中	中の下	下
10.3	27.3	31.7	18.8	10.8

(5) 中学時代の成績

上	中の上	中	中の下	下
50.5	33.4	11.6	2.9	0.8

(6) 大学・短大受験の有無

受けた	受けなかった
89.4	9.0

(7) 国公立受験の有無

受験しなかった	共通一次だけ受けた	二次試験も受けた
59.4	9.8	26.3

(8) 大学・短大の指定校推薦への応募と合否

合　格	不合格	学内選考で落ちた	応募しなかった・不　明
11.0	1.6	2.6	84.8

(9) 大学・短大の一般推薦への応募と合否

合　格	不合格	応募しなかった・不明
8.0	7.6	84.4

(10) 高校卒業後の進路

就職	家業・家の手伝い	各種・専修学校	短大	4年制(私立)	4年制(国公立)	浪人	その他	まだ決まっていない
2.1	0.3	7.5	15.2	26.4	11.4	24.1	1.1	10.8

(11) 大学・短大へ進学後の生活の重点

勉強	サークル活動	自分の趣味	友人関係	就職や資格取得	アルバイト	なんとなくすぎていく	その他
38.4	7.4	10.9	18.6	15.3	1.3	1.7	4.7

第II章 大学入試への高校生の意見

共通一次試験も10年目を迎えた。しかし、ここ数年は実施内容がたびたび変更されている。さらに、65年度からは大学入試センター試験(新テスト)が実施されるという。猫の目のように変わるこのような変化は、受験生にどう受けとめられているのか。また私立大・短大志望者の中には、推薦入学によって大学への入学許可を手にした高校生も少なからずいる。

本章では、受験の興奮の冷めやらぬ3月の時点で、高校3年生に経験してきた入試制度に対して、どのような意見や要望を持っているのかをたずねた結果を分析する。

1. 大学受験の状況

(1) 大学を受験した生徒

まず、調査対象の高校生たちの大学受験への取り組みから見てみたい。表II－1は、調査対象校15校の生徒の受験状況を属性別にまとめたものである。大学・短大を受験した(含む推薦)生徒は89.4%にのぼる。この数値は、調査対象校が全日制普通科の、しかも上・中位校であることを物語っている。性別では、男子95.4%に対して女子83.7%と、男子が約12%ほど上まわっている。高3時の校内での成績別でみると、上位者から下位者へきれい

に差がついており（95.2%＞95.0%＞91.0%＞82.3%＞79.1%）、上位者と下位者では16%の差を生じている。高３時の成績が大学受験の動向に影響を与える要因の一つであることがわかる。

次に、表II－２によって国公立受験の動向を見てみよう。大学受験者のなかで共通一次試験を受けた者は36.1%（②と③の合計）と４割弱である。さらに二次試験まで受けた者は26.3%にすぎない（この数値は、共通一次受験者の73.9%にあたる）。つまり、約３割の者はA、B分割で受験チャンスがふえたといわれながら、共通一次試験だけで国公立受験をあきらめたことを物語っている。性別では、共通一次試験（男子48.2%＞女子22.8%）にしても二次試験（男子34.8%＞女子17.2%）にしても、2倍以上男子が高い。これは、女子の志望の多い文系に比して、理系の大学・学部が国公立に多いことの反映と思われる。なお、高３時の成績別では大きな差異は認められない。学校ランク別では、男子Aランク校が共通一次76.0%、二次65.5%と最高値を示し、次いで女子Aランク校が43.2%、33.8%でつづいている。男子と女子のBランク校は全体値より若干低い。さらに女子Cランク校は、2.1%と0.5%で国公立受験者がほとんどいないことを示している。

以上のことから、国公立受験はAランク校の生徒を中心に行われており、だれもが受けられるような状況ではないことが理解できよう。

表II－１　大学受験の動向

(%)

属性／項目	全体	性別		高３の成績別				
		男子	女子	上	中の上	中	中の下	下
① 大学・短大を受けた（含む推薦）	89.4	95.4	83.7	95.2	95.0	91.0	82.3	79.1

表II－２　国公立受験の動向

(%)

属性／項目	全体	性別		学校ランク別				
		男子	女子	男子A	男子B	女子A	女子B	女子C
① 受験しなかった	59.4	45.5	74.7	16.7	58.6	52.5	62.7	97.3
② 共通一次試験だけ受けた	9.8	13.4	5.6	10.5	15.2	9.4	7.8	1.6
③ 二次試験も受けた	26.3	34.8	17.2	65.5	20.2	33.8	25.5	0.5

(2) 進学状況

次に調査対象者の進学状況を示すと以下のようになる。

①各種学校・専修学校	7.5%
②短期大学	15.2%(41.3%)
③4年制大学(私立)	26.4%(36.8%)
④4年制大学(国公立)	11.4%(6.9%)

㊟( )内は推薦合格者の割合を示している。

大学進学者(②③④の合計)は53.0%と過半数に達しているが、国公立大学に進学できた者は11.4%であり、大学受験者のなかでも12.7%にすぎない。

推薦入試についての詳細は後述するが、②・③より短大・4年制私大進学者の約4割が推薦合格者で占められていることがわかる。また、大学受験者中の推薦応募状況を示すと次のようになっている。

	男子	女子
①指定校合格	9.6%	14.3%
②一般推薦合格	2.1%	15.5%
③推薦不合格	5.7%	17.5%
④推薦非受験	82.6%	52.7%

女子の場合は47.3%(①・②・③の合計)、つまり約5割はなんらかの推薦入試を経験しているのである。以上のことからわかることは、推薦入試がかつての補助的な役割を脱して、入試制度の重要な柱の一つになっているということである。

2. 生徒の望む入試制度とは

前節でみてきたような大学受験を経験してきた高校生たちにとって、望ましい入試制度とはどのようなものであろうか。以下いくつか検討してみたい。

(1) 入試方法について

図II－1は、①から⑧のような大学・短大の入試方法について賛成か、反対かという問いに対する回答を集計したものである。調査グループで話し合った入試改善方法を生徒たちにぶつけてみたのだが、結果としては、過半数の賛成を得られるものは1つもなかった。「どちらともいえない」という答えが、①で44.1%、②で39.1%、③で41.6%、⑤で40.5%と4割前後を占め、しかも賛成、反対より上まわっている。これは生徒も迷って決めかねているという姿のあらわれであろう。

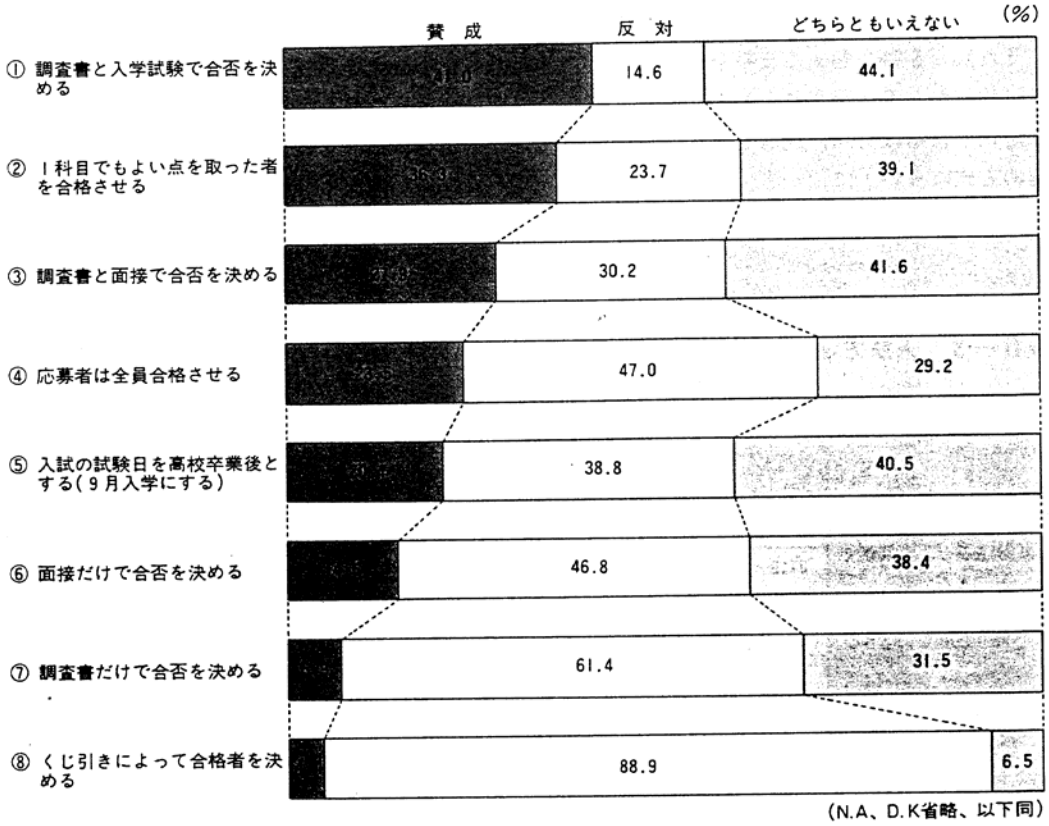
そのなかで賛成率が一番高かったのが、「①調査書と入学試験で合否を決める(41.0%)」というものだが、これは一般推薦で多くの大学が採用している方法である。ちなみに一般推薦で合格した生徒たちの意見を集計すると、「調査書と入学試験で合否を決める」は賛成36.1%、反対5.6%、どちらともいえない58.3%となっている。賛成が全体値より低いということは受験した本人たちにとっては必ずしも良い方法とは思っていないことがわかる。次いで「②1科目でもよい点を取った者を合格させる(36.3%)」が支持されている。信州大学経済学部の二次試験で採用されて人気を得た方式である。この2つだけが反対を上まわって支持されているということは、生徒たちに学力試験に対する信頼感が根強いことを物語っていよう。

「③調査書と面接で合否を決める(27.9%)」というのは、指定校推薦に多い方法である。筆者が意外に思ったのは、「④応募者は全員合格させる」が賛成23.5%に対して反対47.0%と反対が5割に近く、しかも賛成の2倍に達していることである。④は、入り口は広くして出口を狭くするというアメリカ方式で、日本のように校地が狭く施設・教員が少ないところでは難しいとは思うが、加熱する受

験を冷やす上では有効だし、多くの生徒も賛成すると思っていたのである。しかし、多数の生徒は現在の日本のような入り口を狭くして入ってからゆっくりするほうに賛意を示したといえよう。また、「⑦調査書だけで合否を決める」に反対が多い(61.4%)のは、高校3年間まるまる学校に縛られてはたまらないという意識のあらわれであろう。さらに「⑧くじ引きによって合格者を決める」には断然拒否反応が強い(反対88.9%)。これは、生徒たちが偶然的なものではなく、学力試験にしても調査書にしても、大学入試はなんらかの努力の積み重ねの結果を重視すべきだと考えている証拠であろう。

表II－3は、属性別に入試方法の賛成率を示したものである。性別では、女子に「①調

図II－1　望ましい入試方法は？



(N.A、D.K省略、以下同)

査書と入学試験で合否を決める(44.4%)」と「③調査書と面接で合否を決める(32.8%)」が多く、男子に「②1科目でもよい点を取った者を合格させる(41.1%)」が多い。概して授業に真面目な女子と一発屋の多い男子の姿が出ている、といったら一面的な見方だろうか。高3時の成績別では、成績のよい、つまり調査書の評定平均値が高い、上と中の上の者が①(共に47%)に、評定平均値の低い中以下の者が②(39%〜40%)に最も高い賛意を示している。つまり自分に都合のよいと思われる方法に賛成しているのである。

推薦応募別では、指定校合格者が①(51.0%)に、一般推薦合格者が③(51.4%)に、それぞれ唯一5割を超える支持を示している。共に体験から導き出されたものであろうが、指定校合格者は実際に経験した③より一般推薦の方式に多い①に、一方、一般推薦合格者は、逆に指定校推薦の方式に多い③により賛意を示しているのは興味深い。隣の芝生はよくみえたのであろうか。

最後に、生徒たちに、理想とする入試方法について自由に書いてもらった結果を一部紹介しておく。

○認定試験にして、一定の点数以上の者は合格させる。

○数回の共通試験を設けて、一番よい点数を合計する。一発勝負がなくなり、実力が計れる。

○面接時間をたっぷりとってやるべきだ。

○大学側がどんな生徒を入学させたいのかの判断基準を示し、小論文、面接、口述弁論などを行う。

○小論文を重視すべきである。

○自分の最も興味のあることについて調べたレポートを提出する。

○何か他人より優れているものが1つでもあるかどうかを考慮する。

表II－3　入試方法×属性

(%)

属性 / 項目	性別		高3の成績別					推薦応募別			
	男子	女子	上	中の上	中	中の下	下	合指定格校	合一般推格薦	不合推格薦	非受推験薦
① 調査書と入学試験で合否を決める	37.9 <	(44.4)	(47.0)	(47.3)	38.1	32.9	37.9	(51.0)	36.1	(43.8)	39.0
② 1科目でもよい点を取った者を合格させる	(41.1) >	30.7	24.0 <	34.5 <	(39.1) <	(39.9) <	(40.2)	31.0	20.8	33.3	(39.3)
③ 調査書と面接で合否を決める	23.5 <	32.8	33.0	28.0	25.5	27.2	31.0	44.0	(51.4)	33.3	21.8
④ 応募者は全員合格させる	26.4 >	20.0	15.0	16.7	27.9	28.5	31.0	18.0	9.7	27.1	25.3
⑤ 入試の試験日を高校卒業後とする(9月入学にする)	22.4	18.1	18.0	19.7	18.4	21.5	27.6	16.0	18.1	13.5	21.3
⑥ 面接だけで合否を決める	17.6	11.2	10.0	8.3	16.3	20.3	23.0	9.0	12.5	14.6	14.4
⑦ 調査書だけで合否を決める	8.6	5.1	9.0	8.7	4.4	6.3	9.2	7.0	4.2	11.5	6.2
⑧ くじ引きによって合格者を決める	7.1	1.4	2.0	2.7	4.4	5.1	11.5	3.0	1.4	4.2	4.0

賛成の割合　◯ 各属性の最高値

(2) 優先入学について

次に視点をかえて、望ましい入試制度の一つとして学力以外の能力を評価すべきだという意見があるので、この点を生徒たちにきいてみたのが表II－4である。①から⑩のどの項目をとっても「無条件で入学させる」ことには否定的である。生徒たちは、受験は金(⑨寄付金1千万円出した生徒）や名声（⑩有名なタレント）に左右されない神聖なものであり、公平であるべきだという観念を持っている。

しかし、「無条件で入学させる」と「一定の人数まで優先して入学させる」と「入試の点数に加算する」を加えてなんらかの形で入試の成績に加味すべきであるという意見には賛成が多い項目もある。「①全国レベルの大会で3位以内に入った運動選手」には75.6%の生徒が賛成している。いくつかの大学などで行っている運動選手ウクについて多くの生徒は容認しているといえる。ついで「②無遅刻・無欠席・無欠課の生徒(59.3%)」に対する評価が高い。大学教育に耐えられる人材であるかどうかを見きわめるのが大学側の入試に対する視点であるならば、②のような内容は二次的なものであろう。しかし、受験生や高校現場からするならば、高校生活をどのようにすごしたかという大学受験に至る過程を

表II－4　優先入学の是非

(%)

項目＼尺度	無条件で入学させる	一定の人数まで優先して入学させる	入試の点数に加算する	他の生徒と同じにあつかう
① 全国レベルの大会(国体、インターハイ、甲子園野球大会など）で3位以内に入った運動選手	6.9	31.6	37.1	23.9
② 無遅刻・無欠席・無欠課の生徒	3.9	8.4	47.0	40.5
③ ボランティア活動を熱心にやった生徒	2.6	8.7	42.7	45.9
④ 長期間外国にいっていた生徒(帰国子女)	1.3	21.3	27.0	50.1
⑤ 部活動の部長やキャプテンをした生徒	1.6	6.1	37.5	54.5
⑥ 生徒会長をした生徒	1.4	4.9	37.6	55.8
⑦ 学年で成績が1番の生徒	5.0	12.5	20.4	61.7
⑧ 社会人(5年以上仕事をした人)	2.2	18.3	15.2	64.0
⑨ 寄付金を1千万円出した生徒	2.9	1.0	2.3	93.1
⑩ 有名なタレント	1.3	0.9	2.0	95.5

も評価してほしいという要望があるのである。特に「⑤部活動の部長やキャプテンをした生徒(45.2%)、⑥生徒会長をした生徒(43.9%)」や「学年で成績が1番の生徒(37.9%)」より②の真面目さとねばり強い努力に報いるべきだという発想には、これを達成することの難しさを知っている生徒たちにとっては至極当然といえよう。調査書には、欠席日数を書く欄はあっても遅刻、早退、欠課などを書く欄はない。調査書の改訂と共に②を考慮するような大学が出現することを期待している。

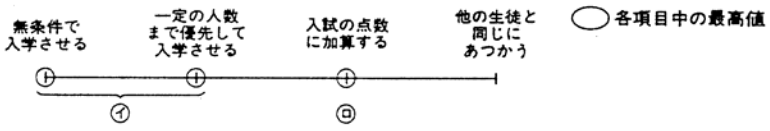
次に「③ボランティア活動を熱心にやった生徒(54.0%)」を評価し、最近大学側でも取り組んでいる帰国子女ワクについてきいた「④長期間外国にいっていた生徒(帰国子女)」に対しては、「他の生徒と同じにあつかう」べきだ(50.1%)という意見とちょうど半々になっている。また、「⑧社会人(5年以上仕事をした人)(35.7%)」については否定的意見が多かった。

表II－5は、属性別に㋑「優先入学させる(無条件＋一定の人数)」と㋺「入試の点数に加算する」に分けて示したものである。性別では、女子になんらかの形で入試の成績に加味すべきであるという意見(㋑・㋺の合計)が強い。①では男子70.8%＜女子80.5%、②男子は55.9%＜女子62.8%、③は男子49.9%＜女子58.2%となっている。推薦応募別では、

表II－5　優先入学の是非×属性

(%)

属性＋尺度 ＼ 項目	性別 男子 ㋑ 無条件＋一定の人数	性別 男子 ㋺ 点数を加算	性別 女子 ㋑	性別 女子 ㋺	推薦応募別 指定校合格者 ㋑	指定校合格者 ㋺	一般推薦合格者 ㋑	一般推薦合格者 ㋺	推薦不合格者 ㋑	推薦不合格者 ㋺	推薦非受験者 ㋑	推薦非受験者 ㋺
①全国レベルの大会(国体、インターハイ、甲子園野球大会など)で3位以内に入った運動選手	40.4	30.4	36.3	44.2	49.0	35.0	26.4	52.8	43.7	31.3	37.6	36.6
	70.8		80.5									
②無遅刻・無欠席・無欠課の生徒	12.3	43.6	12.1	50.7	10.0	59.0	9.8	61.1	12.5	47.9	12.6	43.3
	55.9		62.8									
③ボランティア活動を熱心にやった生徒	13.2	36.7	9.1	49.1	12.0	50.0	8.3	54.2	9.4	46.9	11.9	39.0
	49.9		58.2									
④長期間外国にいっていた生徒(帰国子女)	21.4	28.5	23.5	25.6	24.0	30.0	22.2	31.9	22.9	19.8	21.8	28.5
	49.9		49.1									
⑤部活動の部長やキャプテンをした生徒	9.6	31.7	5.6	43.7	9.0	48.0	5.6	48.6	7.3	37.5	7.8	34.4
	41.3		49.3									
⑥生徒会長をした生徒	5.9	31.0	6.8	44.7	4.0	51.0	5.6	51.4	8.4	42.7	6.2	32.8
	36.9		51.5									
⑦学年で成績が1番の生徒	16.6	17.4	18.4	23.5	20.0	29.0	16.7	27.8	25.0	22.9	15.6	18.0
	34.0		41.9									
⑧社会人(5年以上仕事をした人)	19.0	15.9	21.9	14.2	16.0	20.0	19.5	19.4	20.8	10.4	21.0	16.0
	34.9		36.1									
⑨寄付金を1千万円出した生徒	5.4	2.9	1.8	1.6	2.0	4.0	1.4	1.4	4.2	1.0	3.8	2.6
	8.3		3.4									
⑩有名なタレント	3.6	2.1	0.7	1.9	1.0	2.0	0.0	1.4	2.1	0.0	2.2	2.6
	5.7		2.6									



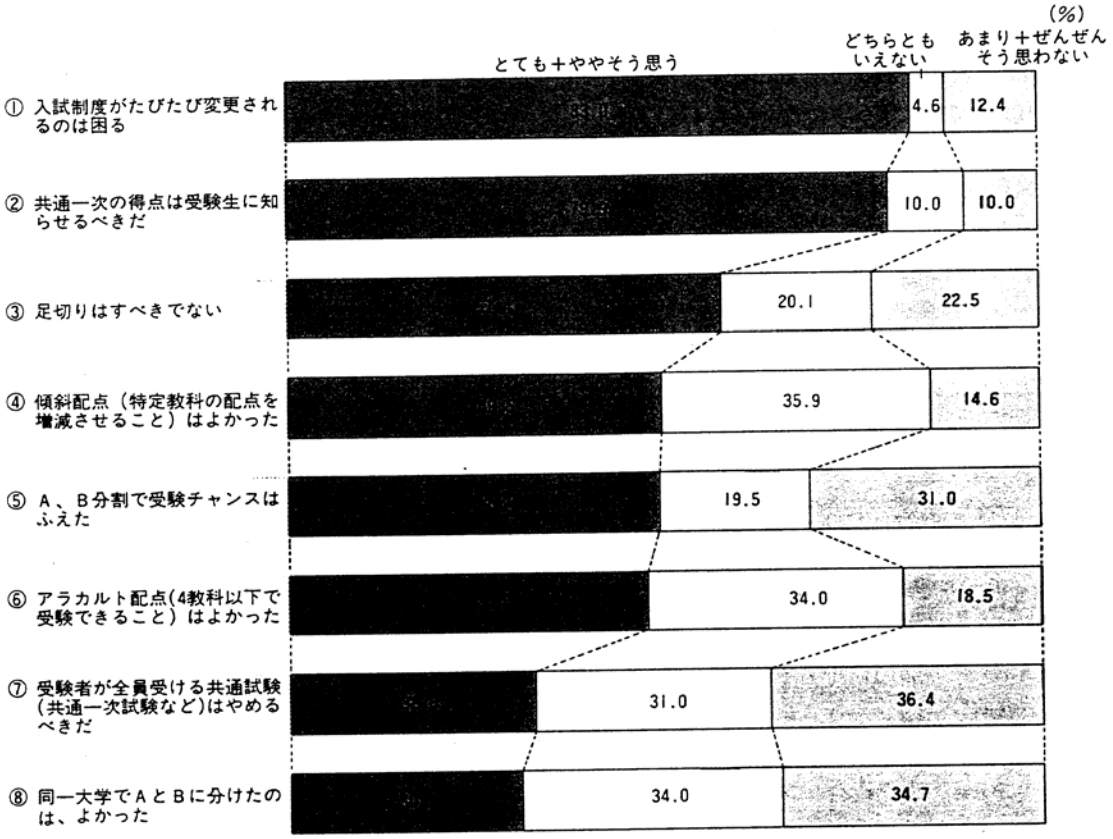
◯ 各項目中の最高値

指定校合格者と一般推薦合格者に肯定率が高い。たとえば①では指定校84.0%、一般79.2%に対して推薦不合格者と推薦非受験者はそれぞれ75.0%、74.2%である。②では指定校69.0%、一般70.9%に対して不合格60.4%、非受験55.9%である。これは、指定校合格者や一般推薦合格者中に①、③、⑤、⑥などの生徒が多いことを物語っているのであろう。

(3) 国公立の入試について

ここ数年国公立の入試制度が毎年のように変更されている。こうした状況に対して生徒はどう感じているのだろうか。生徒たちの意見を集計したものが図II－2である。生徒たちが最も痛感しているのは、「①入試制度がたびたび変更されるのは困る(83.0%)」とい

図II－2　国公立入試制度の改善要望



うことと、共通第一次学力試験実施以来10年間繰り返し言われてきた、「②共通一次の得点は受験生に知らせるべきだ(79.9%)」という2点である。高校現場の教師たちもこの点はまったく同感である。選ぶ大学側の質のよい学生をとりたいという思惑だけで制度をいじるのは受ける側にとっては迷惑この上ない。また、点数のみを重視するのもうなずけない。さらに、共通一次のみならず、すべての入学試験の成績はどこかの時点で受験生に知らされるのが妥当と考える。新テストにおいても受験生に得点を知らせないということであるが、そうなると、入試センターは予備校を太らすのに手を貸しているというくちさがない悪口が真実味をおびてくることになろう。

「③足切りはすべきでない(57.4%)」という意見も受験生側からするとうなずける。一方、「④傾斜配点（特定教科の配点を増減させること）はよかった(49.5%)」「⑤A、B分割で受験チャンスはふえた(49.2%)」「⑥アラカルト配点（4教科以下で受験できること）はよかった(47.4%)」と、ここ1、2年の制度改革については概して賛成している。しかし、今年も某大学で紛糾したA、B分割については、「⑧同一大学でAとBに分けたのは、よかった」に対する意見は賛成30.7%、どちらともいえない34.0%、反対34.7%となっており、あまり評価されているとはいえない。また、国公立受験のための共通試験（共通一次試験など）の存廃については、「⑦やめるべきだ」という意見に対して、賛成32.6%、反対36.4%、どちらともいえない31.0%となっている。この数値からは、生徒たちの中にも判断がつきかねている様子が読み取れる。

次に表II－6によって、属性別の特徴を見

表II－6　国公立入試制度の改善要望×属性

(%)

属性 / 項目	性別		高3の成績別					高校ランク別			
	男子	女子	上	中の上	中	中の下	下	男子A	男子B	女子A	女子B
① 入試制度がたびたび変更されるのは困る	81.7	85.7	74.4	87.4	82.6	78.9	87.5	80.4	82.9	88.3	79.4
② 共通一次の得点は受験生に知らせるべきだ	79.6	81.7	84.6	77.5	76.1	86.5	81.3	78.8	80.0	90.0	67.7
③ 足切りはすべきでない	53.9	<65.3	48.7	58.5	59.8	50.0	68.8	53.7	53.3	71.6	52.9
④ 傾斜配点（特定教科の配点を増減させること）はよかった	50.0	49.0	46.1	63.0	43.5	36.5	46.9	46.4	54.3	53.3	38.2
⑤ A・B分割で受験チャンスはふえた	49.1	50.0	56.4	54.0	50.0	38.5	40.6	45.5	54.3	50.0	53.0
⑥ アラカルト配点（4教科以下で受験できること）はよかった	44.3	<55.1	46.3	47.7	46.7	42.3	62.5	41.4	47.6	56.6	55.9
⑦ 受験者が全員受ける共通試験（共通一次試験など）はやめるべきだ	31.3	35.7	38.4	35.1	32.6	26.9	25.1	29.2	33.3	38.3	32.3
⑧ 同一大学でAとBに分けたのは、よかった	31.7	28.6	28.2	34.2	27.1	32.7	31.3	28.5	34.3	30.0	29.4

とてもそう思う　ややそう思う　どちらともいえない　あまりそう思わない　ぜんぜんそう思わない

(%)

◯ 各項目中の最高値
〰 各項目中の最低値

ておこう。性別では、③(男子53.9%＜女子65.3%)と⑥(男子44.3%＜女子55.1%)に女子の数値が男子より1割以上高い。概して出身地からどこにでも自由に出られる男子に比して、本人も親も極力地元に通うことを志向している女子にとっては受験チャンスのせばめられる足切りには反対の意向が強いのであろう。また、文系志向の強い女子にとってはアラカルト配点は好感が持てたのであろう。

高3時の成績別では、上位者にとっては①の入試制度の変更(74.4%)も③の足切り(48.7%)もさほど気にならず、⑤のA、B分割で受験チャンスがふえた恩恵を一番得た(56.4%)といえよう。中の上位者にとっては、④の傾斜配点の恩恵が一番あった(63.0%)ようだ。また下位者にとっては、⑥のアラカルト配点が有利に働いた(62.5%)ようである。高校ランク別では、女子Aランク校の生徒が①に88.3%、②に90.0%、③に71.6%と最も高い数値を示している。やはり国公立を第一志望とする生徒の多い女子Aランク校には安全志向が強いのであろう。

3．推薦入学についての意見

最後に、最近国公立にも広がってきた推薦入学制度への意見をまとめたのが図II－3である。まず推薦入学制度そのものの存廃についてきいたところ、「⑧推薦入試はやめてほしい」に賛成したのはわずか13.9%(男子17.8%、女子9.6%)の生徒にしかすぎなかった。廃止に反対した者(あまりとぜんぜんそう思わないの合計)が60%にのぼっているということは、高校生にとって推薦入学制度は大学入試の一形態としてしっかりと定着していることを物語っている。特に女子の場合は受験者の47%がなんらかの推薦入試経験者であり、一般入試とほぼ並ぶ受験の形態であることが現実のものとなっている。次に、今後推薦入学はもっと増加したほうがよいと考えられているのだろうか。「④国公立大はもっと推薦入学をふやしてほしい」と「⑤私立大はもっと推薦入学をふやしてほしい」の項目に対して賛成はそれぞれ48.5%(男子45.7%、女子51.4%)と45.3%(男子42.9%、女子47.6%)である。ちなみに反対は25.4%と28.6%である。このことから、生徒たちには国公立にしても私立にしても大幅ではないがもっと推薦入学をふやしてほしいという意向があることが読み取れる。その意向は女子により顕著である。

推薦入試の募集方法としては、指定校と一般推薦の2種類がある。このうち、特定の高校を大学側が指定する指定校制度の是非について問うたところ、「⑦指定校制度をやめてほしい」に賛成は27.3%に対して反対は41.2%に達している。つまり指定校制度には肯定的なのである。もっとも調査対象校の3分の2以上がA・Bランク校で指定校になっているところが多いという状況を考慮してこの数値を読む必要がある。

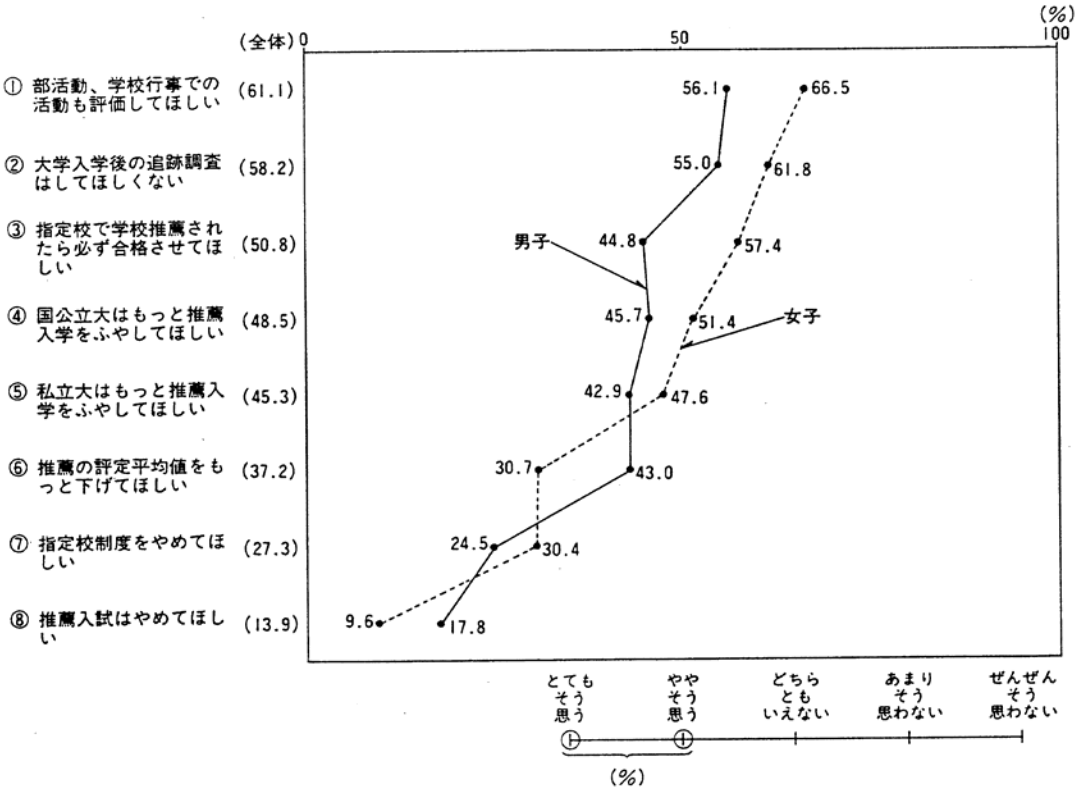
次に推薦の内容であるが、成績のみではなく、もっと「①部活動、学校行事での活動も評価してほしい(61.1%)」と考えている。特に女子は66.5%(男子56.1%)と強く望んでいる。成績の評定平均値の高低に偏りがちな現状の選び方に対して、部活動や学校行事などの特別活動を含めた学校全体での活動を評価してほしいというのはうなずける。しかし、その評価を高校側が数値化なり文章化なりするとなると、生徒に対する高校側の管理強化につながるのではないのかという危惧もなきにしもあらずで、今後とも十分検討する余地がありそうだ。一方、「⑥推薦の評定平均値をもっと下げてほしい(37.2%)」という要望もある。ただし、男子が43.0%なのに比べて女子は30.7%にすぎず、むしろ反対が36.7%と上まわっている。実際に推薦入試経験者が半

数いる女子にとっては、現状が妥当な線と考えているのである。次に推薦後の合否についてであるが、一般推薦の場合は大学側が判定することに異論はないが、指定校推薦の場合は、指定校に条件を示して推薦者を依頼するので校内で推薦会議を開き定員以上の場合は選考して決めている。そうしたことを生徒も知っているので「③指定校で学校推薦されたら必ず合格させてほしい」の賛成意見が50.8%になっている。特に女子は57.4%に達している。指定校推薦後学力試験でかなりの数の生徒を落とす方法は青田刈りという批判が出ていることを十分認識してほしいものである。

最後に推薦で大学に入学した後は、「②追跡調査はしてほしくない(58.2%)」というホンネが出ている。

次に**表II－7**によって属性別の特徴をまとめておこう。高3時の成績別では、中の上位者に④56.9%、⑤50.0%と国公立・私立の推薦入学をふやしてほしいという意見が一番多かった。また中の下位者では①の部活動、学校行事での活動も評価してほしいが63.9%と最も高かった。下位者では、⑥の推薦の評定平均値をもっと下げてほしいが50.6%とどの属性よりも高い数値を示している。それぞれが自己に有利なようにと考えているのは当然といえば当然かもしれない。推薦応募別では、指定校合格者が②79.0%、③73.0%、④72.0%、⑤66.0%に各属性を通じて最高値を示している。推薦に対する積極姿勢がにじみ出て

図II－3　推薦入学制度への要望



いる。一般推薦合格者では①が77.7％と最高値を示している。高校ランク別では、女子Cランク校の生徒が①70.8％、②63.9％、③62.2％、⑤51.1％に最高値を示している。

最後に、「推薦入学について、自由に意見を求めたなかからいくつかを紹介しておく。

○大学側が各高校に足を運んで、その学校の校風なり、生徒の意識をたしかめて何人とるかを決める。

○実際の推薦は品行方正な者よりも成績優秀な者をとっている。成績優秀者は自分を含めて要領のいいやつが多い。（指定校合格者）

○大学が推薦ワクを広げれば広げるほど、個性のない生徒がふえる。また楽をしたいだけの理由で応募する者がふえる。

○浪人生にも推薦ワクを広げてほしい。（複数）

○学業成績以外の能力も同等に評価してほしい。

○推薦も一般入試も卒業後にして、高校生活を充実させてほしい。

○推薦入試での合格者は定員の１～３割にしてほしい。私の受けた短大は、推薦で定員を確保していたので、一般入試の合格者は非常に少なかった。

表Ⅱ－７　推薦入学制度への要望×属性

（%）

属性 / 項目	高3の成績別					推薦応募別				高校ランク別				
	上	中の上	中	中の下	下	指定校合格	一般推薦合格	推薦不合格	推薦非受験	男子A	男子B	女子A	女子B	女子C
①部活動、学校行事での活動も評価してほしい	59.0	61.0	61.6	63.9	59.8	69.0	77.7	66.6	57.4	61.7	54.2	70.5	54.0	70.8
②大学入学後の追跡調査はしてほしくない	56.0	54.9	62.9	60.8	54.0	79.0	65.3	58.3	54.6	60.5	51.5	62.6	57.8	63.9
③指定校で学校推薦されたら必ず合格させてほしい	43.0	55.0	53.7	46.2	43.6	73.0	70.9	59.4	42.9	46.3	44.5	54.7	52.0	62.2
④国公立大はもっと推薦入学をやってほしい	50.0	56.9	48.6	43.0	32.2	72.0	65.3	54.2	41.7	48.8	44.4	53.9	57.8	45.8
⑤私立大はもっと推薦入学をやってほしい	39.0	50.0	46.6	43.1	39.1	66.0	62.5	55.2	37.5	45.1	42.1	43.9	46.1	51.1
⑥推薦の評定平均値をもっと下げてほしい	15.0	26.6	43.5	49.4	50.6	21.0	22.2	31.2	41.1	43.2	44.5	30.2	27.4	33.0
⑦指定校制度をなくしてほしい	26.0	29.5	28.6	23.4	27.5	13.0	40.3	29.2	27.0	25.3	24.6	23.8	35.3	33.0
⑧推薦入試はやめてほしい	21.0	11.7	11.9	14.0	19.5	2.0	1.4	6.3	17.0	19.1	17.9	7.9	5.9	12.8

とても そう 思う　やや そう 思う　どちら とも いえない　あまり そう 思わない　ぜんぜん そう 思わない

（%）

第III章 推薦入試への応募プロセス

1．推薦入試への応募状況

近年の推薦入学の広がりは目をみはるものがあり、大学側ではより良質な生徒をがっちり確保しようと構えるのに対し、生徒のほうでも「あわよくば」早期に楽に大学入学を予約しようという功利的傾向が増大してきている。

中堅以上の大学が過去の実績をもとに指定校のみに推薦を依頼するのに対し、学校差を問わずに一定の成績以上の者が受けられる一般推薦入試は、歴史の浅い大学や短大などが少しでも良い学生とその数を確保するために行っている初期入試とでもいえよう。そのために一般入試がかなり難しくなっていることもある。

表III－1で指定校推薦を受けているのが女子に多いのは次のような理由による。

(1)女子のみに門戸が開かれている短大が多い。

(2)共学校ではしばしば成績上位を女子が占めてしまう傾向があり、どちらかというと男子に希望の多い法学部、経済学部、工学部でさえも女子に推薦のイスをさらわれてしまうケースがある。

同じ表III－1で一般推薦では合否共に女子が多いのは、短大の多くが推薦入学制度をとり入れており、後の調査結果が示すように、女子のほうに「早く合格して安心したい」という気持ちが存在している結果であろう。女子の気持ちは安全志向が強く、教師から見たら本人のレベル以下でもあまり気にしない面を持っているようである。

それに対して男子では、一発勝負の入試に

トライしようという発想があり、教師も「男ならやってみろ」という励まし方をしたりして、推薦基準のかなり低いところにはあまり受験したがらないということがある。

指定校制度をとっている大学の大多数は、高校の推薦に基づき、小論文、面接ぐらいで学力試験に類するものを課していないが、少数ながら学力試験を実施して不合格者を出しているところがあり、高校現場では何のための高校指定かと不評であり、かつて都内の進路指導担当教師100名を集めたＮＨＫのテレビ放送でも話題になった。

ところで推薦で合格した者の成績状況はどうであろうか。調査の性質上、本人の自己申告であるが、図Ⅲ－１にみるように、指定校では中の上以上が３分の２を占め、中まで入れると９割になる。しかし、一般推薦では一定の成績以上の者なら受験の機会を得られるので、中の上までで約４割、中まで入れても４分の３どまりで、相当下位まで幅広く応募していることがわかる。

高校の成績を評定平均値で問わずに、上、中の上、中といつた段階で質問したために本人の意識による差が出てくることもあろうが、推薦を受けるには中以上でなければなかなか合格しないとみてよいであろう。

しかし、一般推薦にはかなり低いところに推薦基準を設けている大学・短大もあり、ワラにもすがる思いでそれを受けて幸運の女神に出会うケースもあるようである。いたずらに夢を追わずに、分に応じたやり方で進学する道もあり、さまざまな生徒を預かる高校の教師にとっては本当にどれが生徒の幸福につながる道なのか、考えさせられることもある。

図Ⅲ－２、図Ⅲ－３はそれぞれ指定校推薦と一般推薦における成績別の合否をみたものである。指定校はやはり中堅以上の大学が入試や入学の実績をもとにして選ぶところだけあって合格者は上位者に偏り、下位の者で合格している者は少ない。すなわち応募者（応募できる者）も少ないことをあらわしている。高校間格差がいわれるが、上位校では上位者が一発勝負の入試を狙い、中位者が推薦を受けるパターンといわれてきたが、近年は必ずしもそうでなく、すべり止めにしそうなところへも結構流れていって上位者が指定校推薦のイスのとり合いをすることもある。

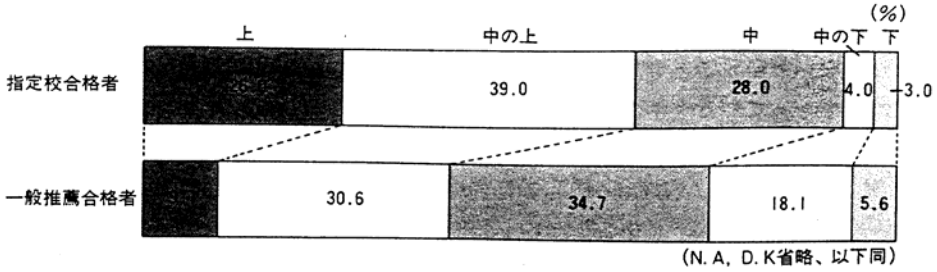
一般推薦はやはり中位者で受ける者が多いが、合否では成績に大きな違いがみられなかった。

表Ⅲ－１　推薦応募と合否

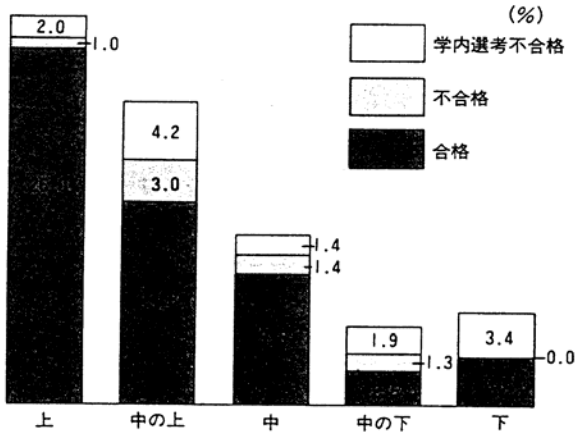
(%)

項目 ＼ 属性		全体	男子	女子
指定校推薦	1. 学校推薦で合格	11.0	8.8	13.5
	2. 学校推薦で不合格	1.6	0.6	2.8
	3. 校内選考で不合格	2.6	1.9	3.5
一般推薦	1. 合格	8.0	2.1	14.7
	2. 不合格	7.6	3.6	12.1

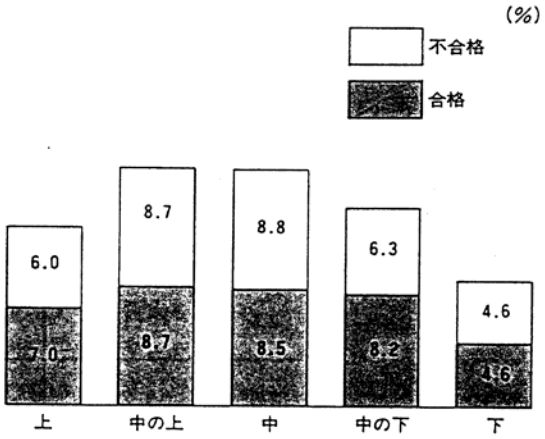
図Ⅲ－1　推薦合格者の成績



図Ⅲ－2　指定校推薦合否×成績



図Ⅲ－3　一般推薦合否×成績



2．推薦入試への応募時期

(1) いつ推薦入学を知ったか

推薦入学の制度があることは、漠然と知っていても自分のこととしてはっきり認識する時期は、自分が中学から高校へ進学する際、あるいは高校での進路ガイダンスにおいてと一般には考えられるが、はたして実際はどうであろうか。

表Ⅲ－2においてその時期をみてみると、中学までは約2割とまだごくわずかであるが、中にはこの高校ではどこの大学に推薦で入れるかということに関心を抱き、それを見定めて受験してくるような生徒もある。また高校でも、どこの大学の推薦指定校であるかを公表して生徒をひきつけるようなこともある。指定校の場合は毎年大学側によって選定されるので3年後は保証されていないから、これがいき過ぎると高校の誇大広告にもなりかねない。新設校や実績のない高校は指定校にはなっていないので、たとえ同じ力をもっていても指定校推薦の門は閉ざされており、その不合理性をつく声もある。

全体の3分の2が高校1年の段階で知っているということは、1年生での進路ガイダンスでふれられていることを示しているのであろうが、1年生のガイダンスでふれないところもあるであろうし、あまり推薦入学を積極的にすすめない学校もある。特に上位校であれば、最初から推薦などのないところ、特に国公立大学を目指している場合（特に男子）はそんなことに目を向けさせない指導を行っており、推薦制度に対する認識が相対的に遅くなることは十分うかがえる。推薦入学花ざかりの短大進学もある女子のほうが早くこの制度をよく知っているのは当然の帰結である。

成績の面からみると、表Ⅲ－2が示しているように上位者ほど早期にこの制度を知っている。上位者ほど自分の将来のことを早くか

表Ⅲ－2　推薦入学を知った時期×成績

(%)

属性 / 時期	全体	男子	女子	高3の成績 上位	上位の上	中位の上	中位の下	下位
入学生の頃	1.9	0.0	2.6	0.0	1.0	3.6	3.1	0.0
中学生の頃	20.5	19.7	20.8	41.5	20.8	13.3	12.5	14.3
1年の頃	43.7	36.8	46.4	43.9	45.8	44.5	34.4	42.9
2年の頃	16.8	18.4	16.1	7.3	16.7	21.7	15.6	21.4
3年になってから	16.5	23.7	14.1	7.3	15.6	16.9	31.3	21.4

ら見定め、進路先はもちろん、自分の進路のカジとりの仕方、一般入試を受けるか推薦を受けるかということにまで関心を抱いていることがわかる。このように早めに準備行動に入る上位者は、一般入試にしろ、推薦にしろたいてい良好な結果がもたらされる。「先んずれば人を制す」というところだろうか。そして下位にいくにしたがって遅くなるのは、ぼやっとしていて知らないだけでなく、自信の喪失からなんとか楽に入る方法をさがしていく結果ともよみとれる。一般入試に期待が持てず、ワラにもすがる思いで知った推薦入試の制度はほとんどが一般推薦であるが、推薦基準をクリアーできずにあきらめざるを得なかったり、肝心の実力が不足であえなく敗退している者も多いであろう。

(2) 推薦入試の受験を決意した時期

これまで考察してきたように推薦の制度そのものはかなり早くから知られているが、どの時期に生徒が推薦入試にトライしてみようと決めるかを調べたのが表Ⅲ－3である。この表からも成績上位者のほうが概して推薦によって大学短大に入学しようとすることを早期に決めていることがわかる。しかし高2までは全体の約4分の1であり、成績上位者だけがやや多く、4割弱である。高2が終わり高3へ進級すると大多数の生徒もやっと先がみえてきて上位者の約7割、中の上の者で約6割が推薦の方向を定めている。一方中位者以下は、夏休み前まではいずれとも決めかねていた者が5割を超え、不安と焦燥の中で夏休みを迎え、夏休み中に自分も推薦にトライしようと決心したり、夏休みが終わって友人が推薦を受けようとしているのを知ってあわてて自分もやってみようという気持ちになることが多い。これは一般に受験校の目標すら定まらず、ずるずるとその決定が先送りされ、直前に決まるという一般的パターンでもある。

指定校については、夏休み前に応募概要の発表があり、その推薦基準に合致するものはほとんど上位者が占めるので、この数字の差の原因は納得がいく。それにしても一般推薦受験者はなんと4割以上が夏休み中から夏休み後にかけて決めている。この現状を高校現場での進路指導ではどのように受けとめ、ど

表Ⅲ－3　推薦受験決意時期×成績

(%)

属性 / 項目	全体	男子	女子	高3の成績別 上	中の上	中	中の下	下
高校入学前	1.5	2.6	1.0	4.9	1.0	0.0	0.0	7.1
高1の時	10.1	2.6	13.0	14.6	8.3	9.6	9.4	14.3
高2の時	15.3	15.8	15.1	19.5	20.8	12.0	9.4	0.0
高3夏休み前	28.7	31.6	27.6	29.3	31.3	27.7	25.0	21.4
高3夏休み中・夏休み後	43.7	44.7	43.2	29.3	38.5	50.6	53.0	57.1

のような指導の対策をとっているのであろうか。

推薦制度の是非についてはいろいろ意見もあろうが、その判断は先へ持っていくとしても、正確な情報と仕組みだけは早い時期に、そのシステムをよく理解している進路指導の担当者から同じ密度で全員に周知させておくことが望ましい。各担任まかせではどうしても理解度や関心度の差が生じるのは免れないし、生徒の利益の公平を期してやりたいものである。

(3) 応募した大学・短大の数

推薦に応募した者に応募した数をたずねた結果が**表Ⅲ－4**である。

指定校に応募し合格した者は、ほとんどが1校である。学校によっては指定校への応募は1回限りとし、校内選考に落ちればダメなところもあれば、早い時期に校内選考で落ちた場合、遅い指定校に再度応募できるシステムをとっているところもあり、2校応募ができているのであろうが、数は少ない。

ところが一般推薦になると、一校当たりの推薦人員の制限がなく推薦基準だけということで、多くの大学に出願できそうにも思えるが、実際は1校（84.7%）ないし2校（12.5%）が多い。

一般に、推薦入試の場合は大学側によって、「本学が第一志望であること」という条件がつけられ、合格後の辞退は認められていない。したがって1校目の結果が出ないうちに2校目の出願は許されないのが普通で、推薦入試と合格発表の時期の関係で、2校、3校と応募することはなかなか困難である。それでもなんとか一般入試を避けたいという一念でうまい組み合わせをさがし出す生徒もいる。

また稀に推薦入試と銘打っておきながら合格後の辞退を容認する大学もあるが、これはまさに受験料かせぎ、入学金かせぎではないかと思われ、それに乗せられる生徒がかわいそうである。またそこまで調べあげてすべり止め的感覚で受験する生徒もおり、進路指導の中でどう対処すべきかも一考を要する。

大学・短大の区別を行っていないので詳細な分析はできないが、短大の推薦入試は数が多いだけに多様であり、内容もさることながら、なんとしても受かりたい生徒にはどの1校を選ぶかによって、1校でおさまるか、2校、3校と放浪の憂き目にあうかわかれるようである。

表Ⅲ－4　推薦に応募した大学・短大の数

(%)

尺度 ＼ 属性	指定校に			一般推薦に		
	1つ	2つ	3つ以上	1つ	2つ	3つ以上
指定校合格者	92.0	7.0	1.0	4.0	0.0	0.0
一般推薦合格者	8.3	0.0	0.0	84.7	12.5	1.4
推薦不合格者	27.1	0.0	0.0	67.7	5.2	2.1

3．推薦入試応募の動機

推薦で大学へ入学したいという動機はいろいろあろうが、8つの要素に分けて調べたのが表Ⅲ－5である（主な動機2つに○をつけてもらった）。

まず指定校合格者をみると、指定校の推薦基準にはたいてい第一項に「本学を第一志望とするもの」というのが入っており、そののち一定の成績基準が示してある。しかし、この調査でみるかぎり、受験生のホンネは「一般入試より入りやすいから」とか「浪人したくないから」というところにあることが非常にはっきりあらわれている。特に男子では「浪人したくないから」(59.5%）と「第一志望」（28.6%）の差が約2倍になっており、現代の受験生のチャレンジ精神の欠如がこの指定校合格者をみるかぎりにおいてはよくでているといえる。せっかくの指定校推薦の合格も「ほっとした気持ち」だけが先行して、本当に大学へ入れた喜びも十分出てこないようでは、推薦を実施している大学のメリットは何であろうか。本当に勉学意欲旺盛な学生が集まるのでなく、一定の成績だけが優先することになり、活性化を狙う大学としては、「第一志望」がホンネかタテマエかを判別する方法も求めなければならなくなるだろう。それとも大学としても、それはタテマエであって、一定の成績の生徒を集めたいのがホンネなのだろうか。女子のほうは「一般入試より入りやすいから」(56.9%)にトップをゆずっているものの、約4割は「第一志望の大学・学部だから」ということを表明している。これは女子大、短大に推薦制度をとり入れているところが多く、自分の志望と合致しているところがあるのだと推測される。

一般推薦合格者は、男子ではまた動機の変化があり、いずれも5割を超えたものはないが、3～4割の項目からみると、早く合格が決まって安心して、冬休みはスキーに運転免許、そして3学期はたっぷりと最後の高校生活をエンジョイできるという姿が浮かんでくる。一方女子のほうは「早めに合格して安心」（55.6%）がトップで「一般入試より入りやすいから」(50.8%）と、密接な関係がある2項目が5割を超えている。かわいい気の小さい子とでもいえようか。しかし、入った大学・短大をみてみると、「第一志望だから」というのが多く、5割に近い数字がでており、そういう意味では女子の堅実性がよくでている。

では不合格者はどんな動機から推薦入試を受けようとしたのであろうか、男子は「早く決まれば安心だから」というのが5割を超えているだけである。「浪人したくない」もそれと関連して多いが、合格者とくらべて「第一志望」が多いのが目をひく。女子のほうは「早めに合格が決まれば安心だから」がなんと7割強に及び、数値の中で最高を示している。一般推薦合格者もこの数値が高かったが、女子にどんなに不安が強いかを如実に示している。一般に女子校では就職は夏休み中に動きだし、ウラでは内定がどんどん進んでいく中で、受験生は決定の先送りで、ますます不安をつのらせていく時に、やはり一刻でも早く決めて安心したいという心理が働くのは十分うなずける。ましてや志望校が一般推薦で受けられるとなれば、成績基準さえクリアーしているなら受験してみるのは当然考えられることである。その数字にもっていかれたせいか、「一般入試より入りやすい」というほうの数字がだいぶ下がってしまい、合格者と不合格者の微妙な感情の差があらわれているような気がする。

合格者たちがどのような動機から受けているのかを成績別にみると、「第一志望だから」

が「上」53.7%、「中の上」45.8%、「中」36.1%、「中の下」40.6%、「下」21.4%と、成績上位者ほど多くなっている。これは上位者が、一般入試ではあぶないようなところに学校の推薦によって合格しているため、と思われる。

これらの動機から想像される生徒像は次のようにいえようか。

指定校合格者は、3年間こつこつがんばってきた成果をこの際一般受験ではちょっとあぶないところに入れてもらうのに使おうというもので、入学後もあまりとりこぼすことなくこつこつやるタイプである。

一般推薦合格者には多様なタイプがいるが、なんとか大学にもぐってしまえばこっちのものだと考える者が多そうである。そしてこういう者も入ればなんとかやっていけるのである。しかし、中には入ってしまってからやっていけるのか不安を増す者もいるようである。

推薦入試不合格者は、気が小さくて一生懸命やるのだが、あせるばかりで結局どれにも届かなかったという気の弱いタイプと、何にもしないでおいて僥倖だけを狙うというちゃっかりしたタイプというのが浮かんでくる。

表Ⅲ－5　推薦入試へ応募の動機×推薦合否

(%)

項目＼属性	全体	男子	女子	指定校合格者		一般推薦合格者		推薦不合格者	
				男子	女子	男子	女子	男子	女子
1. 第一志望の大学・学部だから	41.8	27.6	47.4	28.6	39.7	11.1	49.2	32.0	52.1
2. 有名大学だから	4.9	6.6	4.2	4.8	10.3	—	—	12.0	2.8
3. 一般入試より入りやすいから	43.3	36.8	45.8	50.0	56.9	22.2	50.8	20.0	32.4
4. 早めに合格が決まり安心できるから	51.5	38.7	56.8	28.6	37.9	44.4	55.6	52.0	73.2
5. 浪人したくないから	23.9	50.0	13.5	59.5	27.6	33.3	9.5	40.0	5.6
6. 自宅から通えるから	6.7	7.9	6.3	4.8	6.9	44.4	7.9	—	4.2
7. 親や先生からすすめられたから	7.1	5.3	7.8	4.8	10.3	11.1	6.3	4.0	7.0
8. 先輩や友人からすすめられたから	2.6	3.9	2.1	4.8	—	—	1.6	4.0	4.2
9. その他	10.8	11.8	10.4	9.5	6.9	22.2	15.9	12.0	8.5

（2項目選択）

第Ⅳ章 推薦入学と生徒の特性

推薦入学制度は、受験戦争の激化にともなう一元的尺度の導入、学生の特性・能力の均一化に対し、学生の個性や多様性を尊重するという教育的配慮にもとづいて導入されたともいわれる（毎日新聞社編『大学入試の内幕』1983年）。

では実際のところ、推薦入学制度によって入学してくる学生の個性化、多様化ははかられているのであろうか。具体的にいえば、推薦入学は一般入試とは違うタイプの生徒を入学させているのであろうか。

本章では、推薦応募者の特性、自我像、将来像を一般入試受験者との比較をすることによって明らかにしていきたい。

1．推薦応募者はどんな生徒か

推薦に応募する生徒と一般入試を受ける生徒ではどう違うのか。それを生徒自身にたずねた結果が図Ⅳ－1である。

学業面でみると、「ふだんからこつこつ勉強する生徒」（推薦46.4%＞受験31.8%）が推薦生に多く、「試験前に一夜づけをする生徒」（推薦24.8%＜受験44.0%）は、推薦生に少ない。このように、学業面でこつこつとした努力型が推薦生に多い、と生徒自身は評価している。

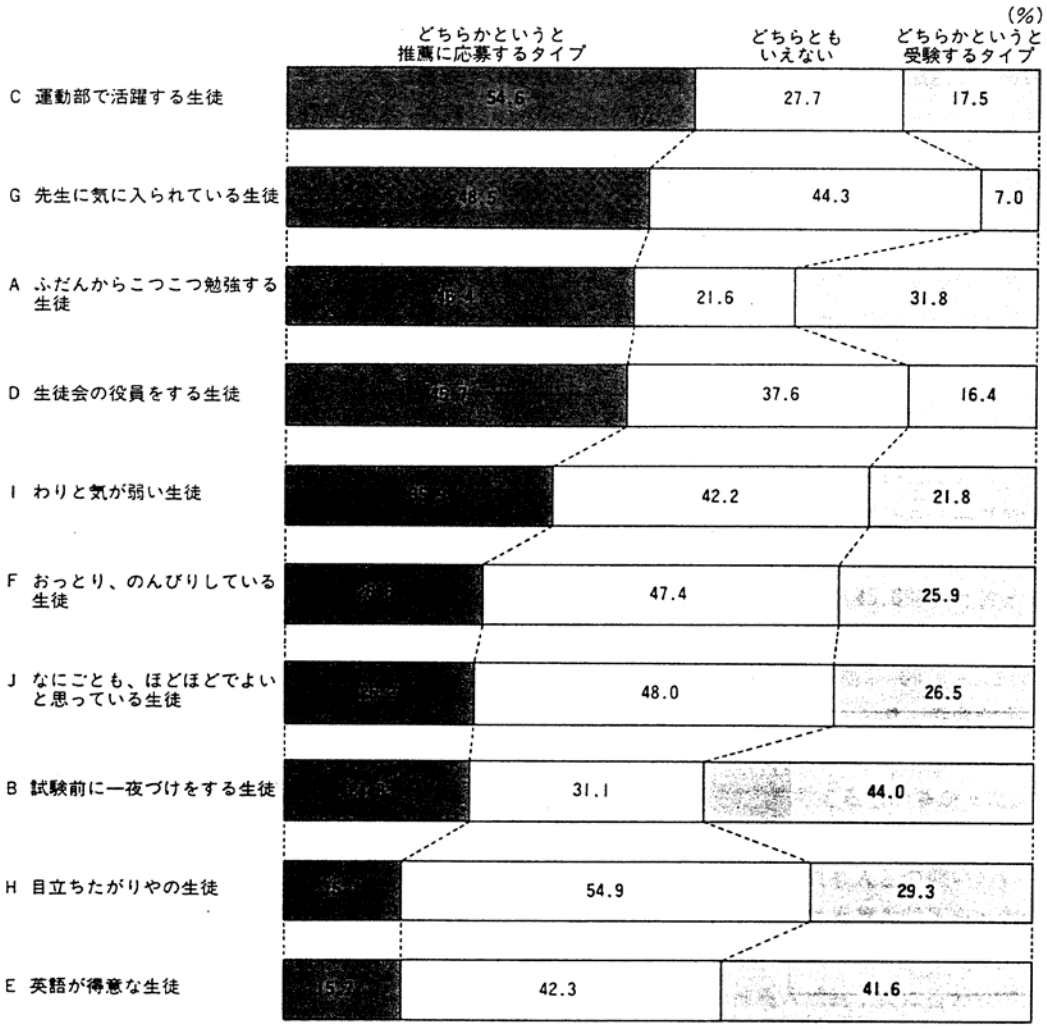
また、教科外での活躍をみると、「運動部で活躍する生徒」（推薦54.6%>受験17.5%）「生徒会の役員をする生徒」（推薦45.7%>受験16.4%）が推薦生に多い。

このように、推薦に応募する生徒は、一般入試で受験する生徒より、学業面でも教科外活動でもすぐれていると生徒自身によって高く評価されている。

しかし一方、推薦生は、「先生に気に入られている生徒」（推薦48.5%>受験7.0%）、「わりと気が弱い生徒」（推薦35.9%>受験21.8%）という、〝よい子〟だけれどもチャレンジ精神のない消極的な生徒とも、仲間からみられている。

さらに、推薦生は「英語が得意な生徒」（推薦15.7%<受験41.6%）という指摘が、圧倒

図Ⅳ－1　推薦応募者への評価



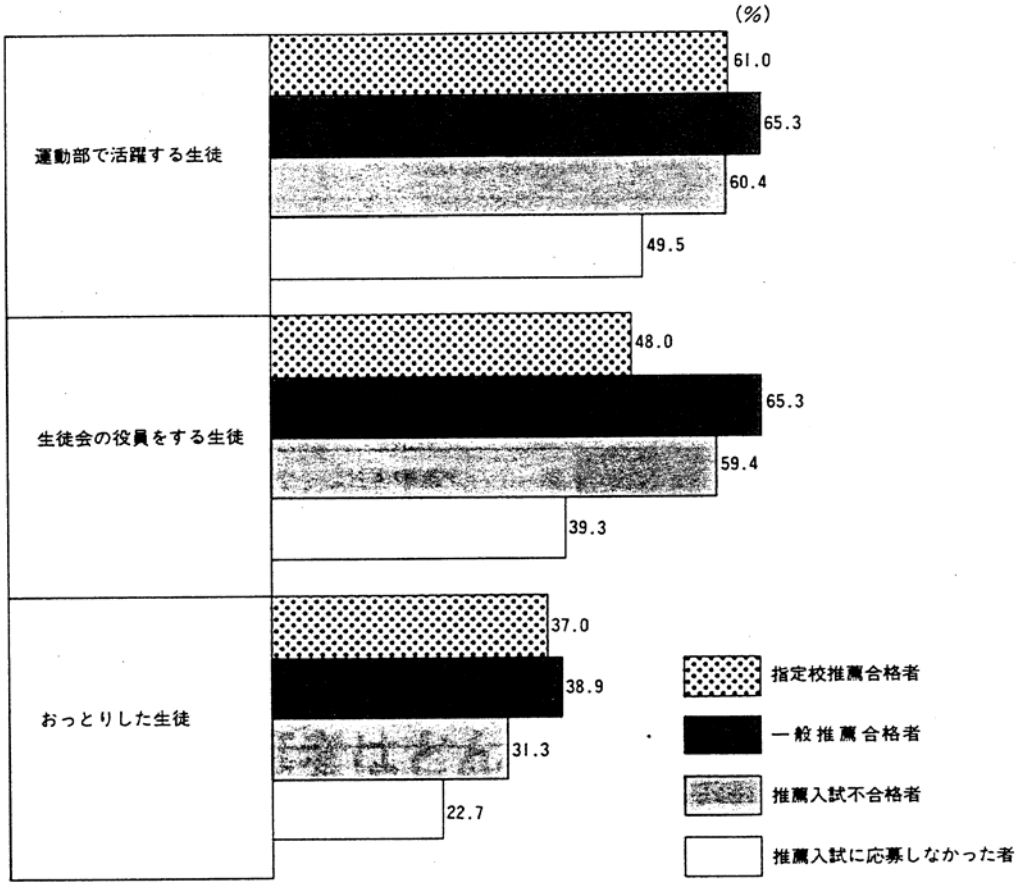
（N.A，D.K省略、以下同）

的に少ない。現在の大学入試で、英語の占める比重は大きい。英語の不得意な生徒は、一般入試を避けて、推薦でなんとか大学に入ろうとするホンネが、ここにはっきり見抜かれている。

このように推薦応募者は、ふだんからこつこつ勉強する生徒、運動部、生徒会で活躍する生徒と評価される一方で、先生に気に入られている、気が弱い、英語が不得意な生徒とみられていることが明らかになった。

図Ⅳ－2は、推薦入学生への評価が、どのような入試形態にコミットしたかによって違ってくるかをみたものである。一般入試を受験した生徒は、推薦生を「運動部で活躍する生徒」や「生徒会の役員をする生徒」「おっとりした生徒」と肯定的に評価することが、推薦で入った生徒より少ないことがわかる。つまり、推薦で決まった生徒は、自分ないし推薦の仲間を肯定的に評価するのに対し、入試受験者は推薦生の特性を、あまりよいものとして評価していないことがわかる。

図Ⅳ－2　推薦応募者への評価（推薦入試へのかかわり方別）



（「どちらかというと推薦に応募するタイプ」と答えた割合）

2．推薦応募者の自我像

次に自己評価をもとに、推薦入試と生徒のさまざまなタイプとの関係についてみることにしたい。

(1) 高校生活

前述したように推薦応募者は、運動部や生徒会などでよく活躍する生徒として評価されていた。そして実際の高校生活を、推薦入試へのかかわり方別にみると、それは図Ⅳ－3のようになる。図に示されるように、指定校推薦合格者、一般推薦合格者、そして推薦入試不合格者からなる推薦応募者は、推薦に応募しなかった者と比較して、「クラスの仕事（委員など）を進んで引き受けた」者が多く、「よく高校を休みたいという気持ちになった」者が少なかった。またどちらかというと、「高校で異性とよく話した」者は推薦応募者に多く、逆に「高校で友だちとあまり話さなかった」者は、推薦に応募しなかった者に多かった。このように推薦応募者は、高校の生活のなかでクラスの仕事などに活躍し、それなりに充実した高校生活を送っていたようであった。また推薦応募者のなかでは、特に指定校、一般の推薦合格者にこの傾向が強くみられた。

ただし先生や校則に対する意見をみると、どちらかというと推薦応募者に「高校の先生に反発を感じた」「通った高校の規則はきびしすぎた」と考える者が多かった。このように推薦応募者は、先生や校則などに対し、かなりプレッシャーを感じているようであった。また推薦応募者のなかでは、特に一般推薦合格者にこの傾向が強くみられた。

(2) 計画性

前述したように推薦応募者は、「一夜づけをする生徒」というよりも、「ふだんからこつこつ勉強する生徒」として生徒自身から評価されていた。このものごとに対する計画性を、推薦入試へのかかわり方別にみると、それは図Ⅳ－4のようになる。図に示されるように、推薦応募者は「目標を決めて、こつこつ努力するのが好きだ」と考える者が多かった。またどちらかというと、「旅をするときは、十分計画をたててから出かける」者も推薦応募者に多く、このように推薦応募者は、目標を決めて努力する「こつこつ型」の人間で、将来への計画性があるタイプのようであった。また推薦応募者のなかでは、特に指定校合格者に「目標を決めて、こつこつ努力するのが好きだ」が多かった。

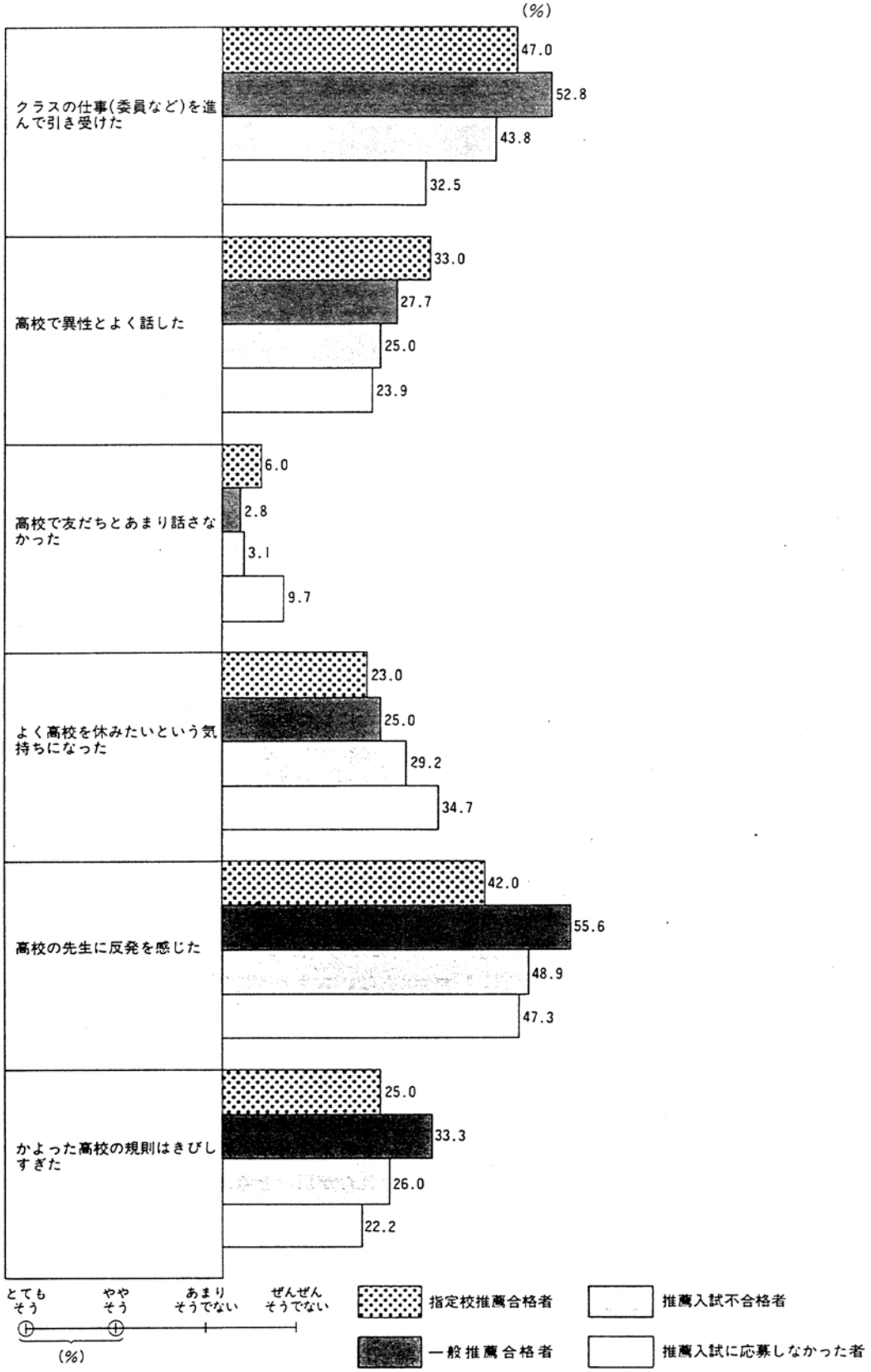
(3) 競争への志向

受験と比較して推薦入試は、一回限りの試験への激しい競争よりも、毎日の努力の積み重ねが重要になるといわれている。ここでは生徒の競争への志向と推薦入試の関係をみることにしたい。

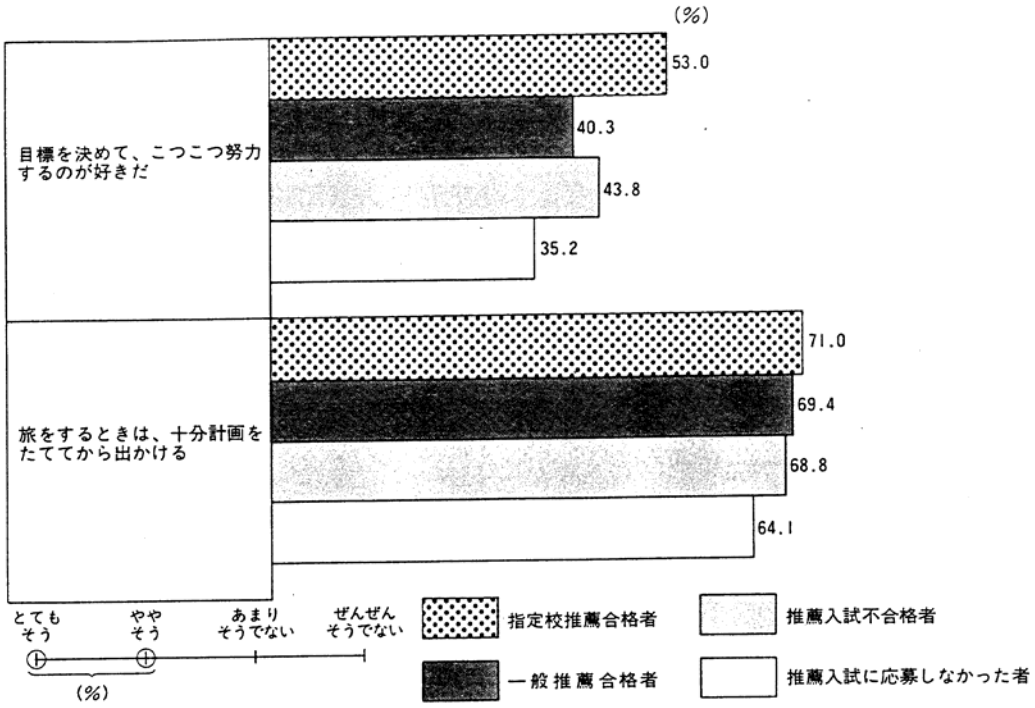
図Ⅳ－5に示されるように、推薦応募者のなかでも競争への志向は分かれており、指定校推薦合格者は、自分のことを「一発勝負には強い」(44.0%) と考える者が多く、「人と競いあうのは得意だ」(45.0%) と考える者が多かった。これに対して一般推薦合格者(68.0%)、推薦入試不合格者(69.8%)には「人と競いあうのは苦手だ」と考える者が多く、さらに推薦入試不合格者は、「一発勝負には弱い」(72.9%) と考える者が多かった。

このように推薦応募者のなかでも、指定校推薦合格者は一発勝負も人との競いあいも強いと考えており、逆に推薦入試不合格者は、それらが弱いと考える傾向がみられた。この傾向は調査が推薦入試終了後に行われており、推薦入試の結果が生徒の競争への志向を規定したためとも考えられる。

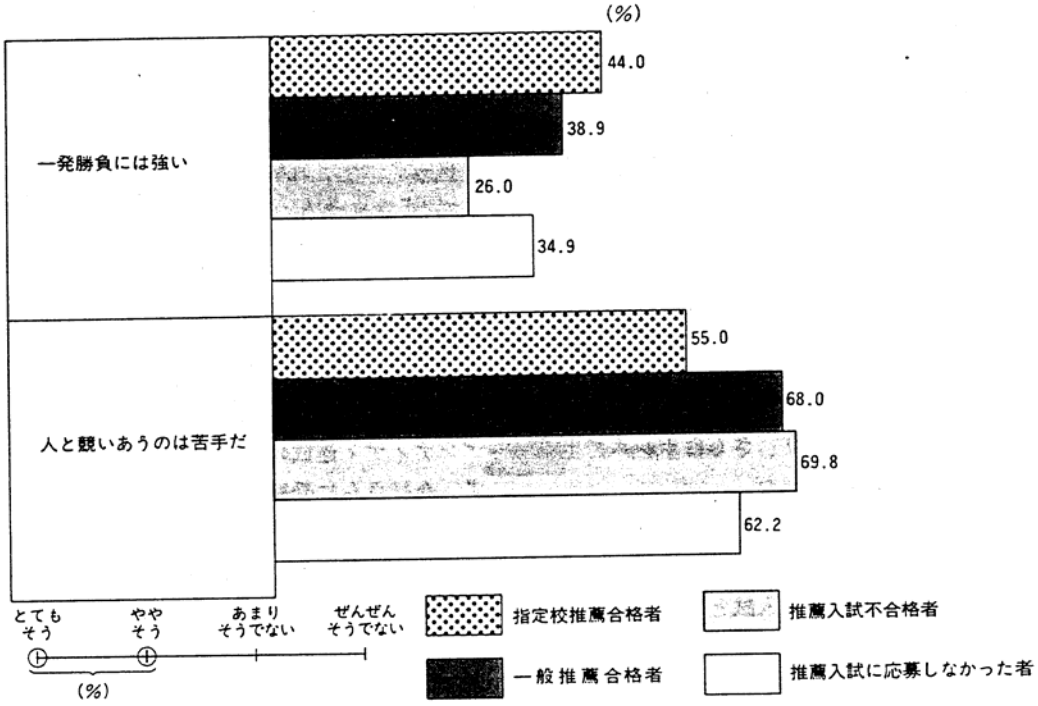
図Ⅳ－3　推薦入試と高校生活



図Ⅳ－4　推薦入試と計画性



図Ⅳ－5　推薦入試と競争への志向



(4) 規範への態度とホンネとタテマエ

推薦入試は受験と異なり、高校3年間の成績、課外活動、日常の行動などが評価の対象となる。これらは受験競争の激化をやわらげ「こつこつ型」を評価する一方で、生徒の、過度の規範への同調を強いる可能性もある。ここでは推薦入試と、生徒の規則や親などの規範への態度、さらにホンネとタテマエについてみることにしたい。

まず生徒の、規則や親などの規範への態度を推薦入試へのかかわり方別にみると、それは図Ⅳ－6のようになる。図に示されるように、指定校推薦合格者（76.0%）、一般推薦合格者（76.4%）は、「規則やルールはよく守る」者が多くなっている。また「親のいうことは、よくきく」者も、どちらかというと指定校推薦合格者（69.0%）、一般推薦合格者（72.3%）に多くなっている。このように推薦入試の合格者は、規則や親などの規範に対し、比較的従順である、ということができる。

次に、推薦入試と生徒のホンネとタテマエの関係をみると、図Ⅳ－6のようになる。図に示されるように、指定校推薦合格者は、「ホンネとタテマエは使い分ける」(70.0%)、「人と意見は違っても、自分に不利なときは口に出さない」(66.0%) が最も多くなっている。このように指定校推薦の合格者は、規範に対して比較的従順である一方で、ホンネとタテマエをうまく使い分けている、ということができる。またこれに対して一般推薦合格者は、「ホンネとタテマエは使い分ける」(55.6%)、「人と意見が違っても、自分に不利なときは口に出さない」(55.6%) が少なく、規範に対して比較的従順であり、さらにホンネで生活している傾向がみられた。

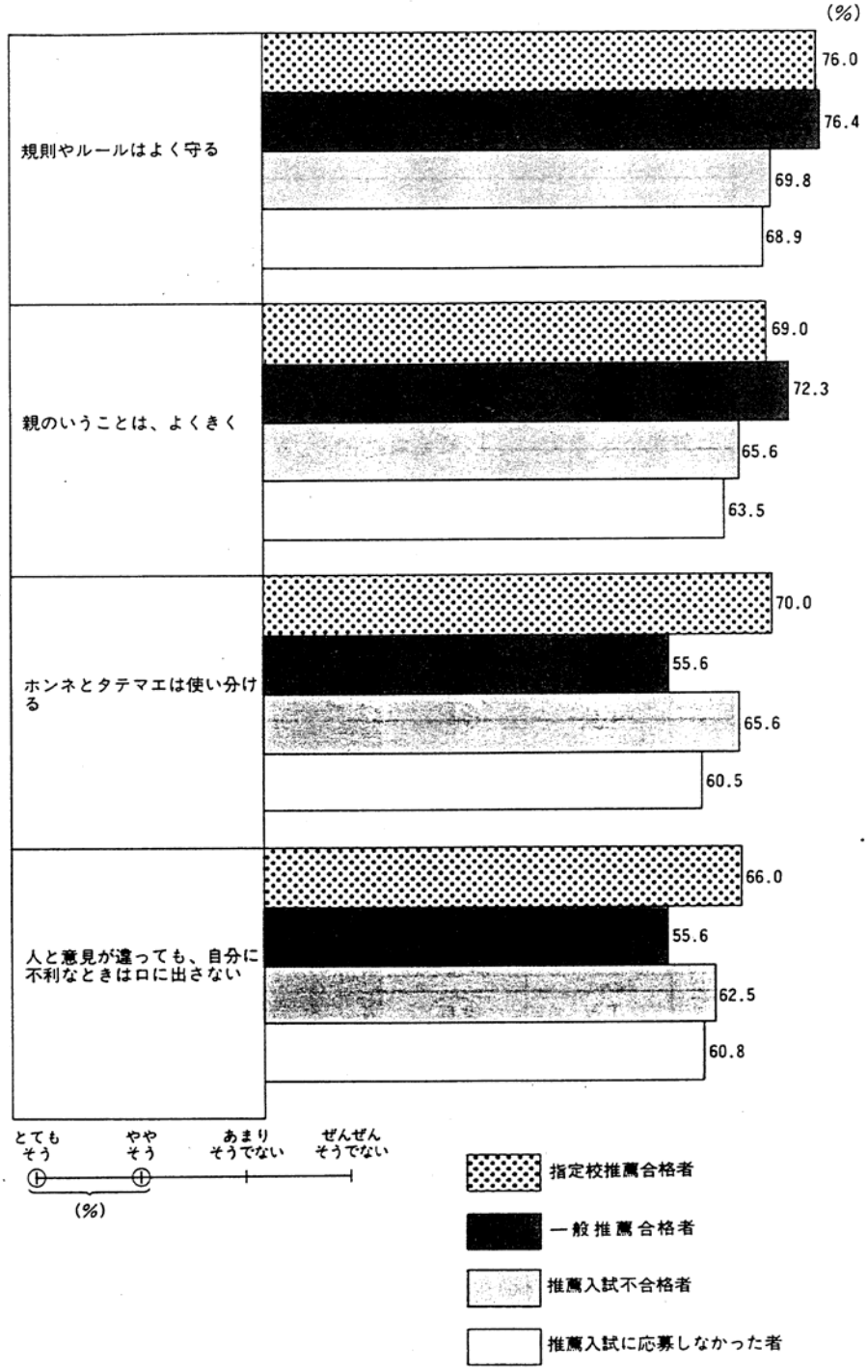
(5) アイデンティティ形成

それでは最後に、推薦入試とアイデンティティ形成の関係についてみることにしたい。一般に現代の青年はモラトリアム青年とよばれ、アイデンティティをなかなか形成できない、といわれている。ここでは「自分の生き方に、疑問を持ったことがある」「悩んで、眠れなかったことがある」などのアイデンティティ危機に関する質問と、「将来つきたい職業を決めている」「自分なりの人生の目標や、価値観を持っている」「40歳ごろは何をしているのか、想像することができる」などの職業、価値観、時間的展望等のアイデンティティ達成に関する質問により、推薦入試とアイデンティティ形成の関係についてみることにしたい。

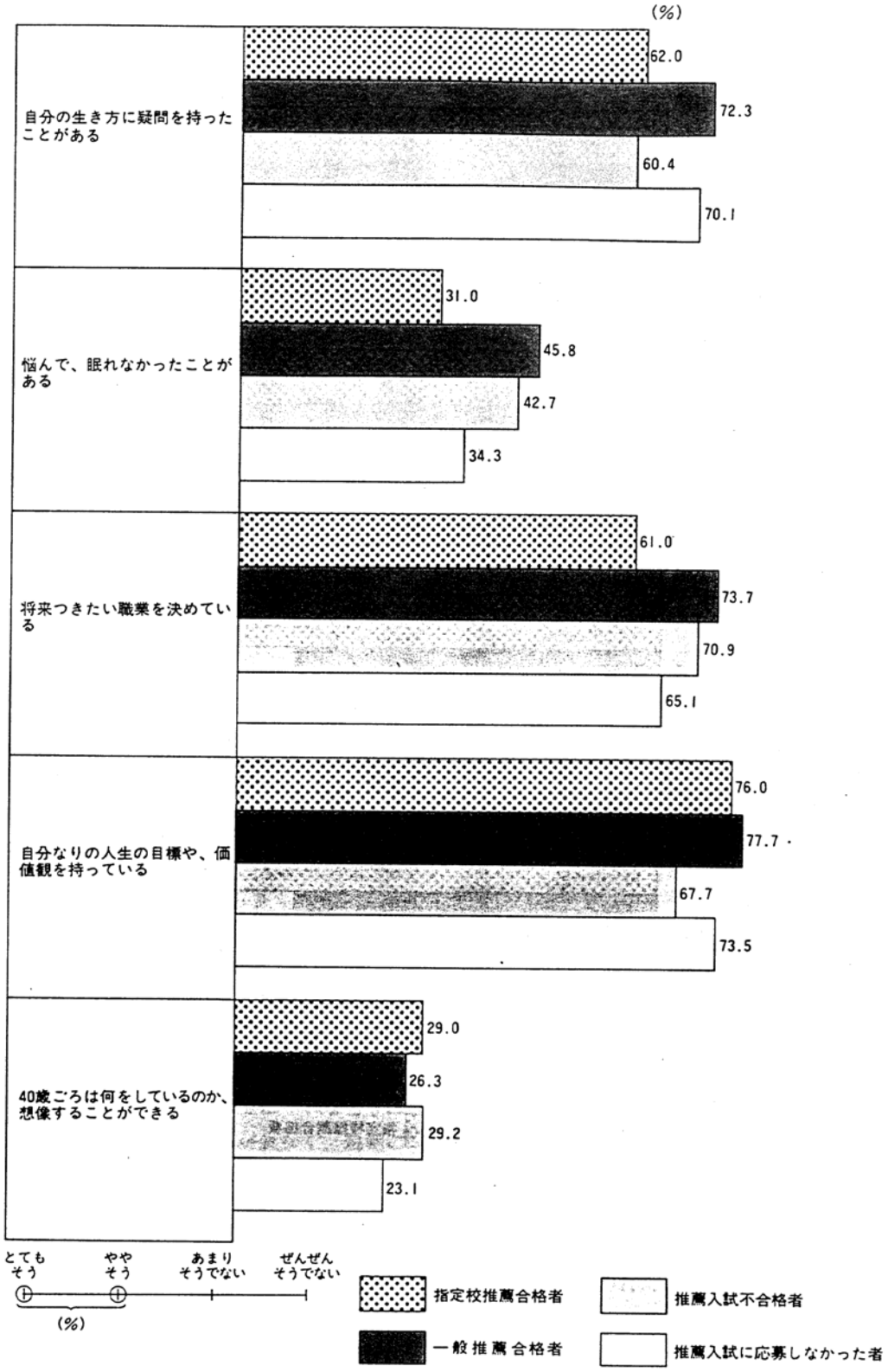
推薦入試とアイデンティティ形成の関係は、図Ⅳ－7のようになる。図に示されるように、アイデンティティ危機については、指定校推薦合格者が、「自分の生き方に、疑問を持ったことがある」(62.0%)、「悩んで、眠れなかったことがある」(31.0%) が少なかった。このように指定校の推薦合格者はアイデンティティの危機の体験が少なく、わりあい順調なライフコースを歩んでいるようであった。またこれに対し、一般推薦合格者（72.3%）、推薦に応募しなかった者（70.1%）に「自分の生き方に、疑問を持ったことがある」が多く、一般推薦合格者(45.8%)、推薦入試不合格者（42.7%）に、「悩んで眠れなかったことがある」が多かった。

次にアイデンティティ達成についてみると、図Ⅳ－7に示されるように一定の傾向はみられず、「将来つきたい職業を決めている」は一般推薦合格者（73.7%）、推薦に応募しなかった者（70.9%）に多かった。また「自分なりの人生の目標や、価値観を持っている」は、推薦入試不合格者（67.7%）に少なかった。このように本調査では、推薦入試とアイデンティティ達成の間に一定の傾向はみられず、今後さらに受験との詳細な比較もふくめた、入試とアイデンティティ達成の関係の分析が必要に思われた。

図Ⅳ－6　規範への態度とホンネとタテマエ



図Ⅳ－7　推薦入試とアイデンティティ形成



3．推薦応募者の将来像

それでは最後に、推薦入試と生徒の将来像の関係についてみることにしたい。一般に現代の青年は現在中心型などとよばれ、将来の展望が持ちにくい、といわれている。ここでは「大企業に入る」「お金持ちになる」などの将来の可能性についての質問により、推薦入試と将来像の関係についてみることにしたい。

推薦入試と将来像の関係は、表Ⅳ－1のようになる。表に示されるように指定校推薦合格者は、「大企業に入る」(72.0%)、「お金持ちになる」(57.0%)、「学者、研究者になる」(33.0%) などをやろうと思えばできる、と考える者が多かった。このように指定校推薦合格者は、自分に対して明るい将来像を描いているようであった。ただし指定校推薦合格者の女子は、「結婚しても、仕事を一生続ける」(46.6%) が少なかった。

また推薦入試不合格者は「有名なタレントになる」(17.7%) が多く、通常とは異なる将来像の傾向がみられた。さらに推薦入試に応募しなかった者は「学者、研究者になる」(35.9%) が多く、女子には「結婚しても、仕事を一生続ける」(72.9%) が多かった。

表Ⅳ－1　推薦入試と将来像

(%)

項目＼属性	指定校推薦合格者	一般推薦合格者	推薦入試不合格者	推薦入試に応募しなかった者
A. 大企業に入る	72.0	40.3	50.0	60.7
B. お金持ちになる	57.0	38.9	46.9	45.7
C. 人に負けない趣味を持つ	76.0	72.2	74.0	74.9
D. 大恋愛をする	66.0	54.1	62.5	59.6
E. 学者、研究者になる	33.0	16.7	17.7	35.9
F. まわりの人から尊敬される	48.0	44.5	40.6	42.4
G. 小さくても、自分の店や会社を持つ	31.0	30.6	35.4	36.4
H. 有名なタレントになる	8.0	5.6	17.7	11.0
I. 結婚しても、仕事を一生続ける（女子のみ）	46.6	61.9	60.6	72.9

絶対できる　たぶんできる　たぶんできない　絶対できない

(%)

そして一般推薦合格者には、「大企業に入る」(40.3%)、「お金持ちになる」(38.9%)、「大恋愛をする」(54.2%) などが少なかった。

ま と め

以上のように本章では、推薦入学と生徒の特性について、1.受験する者と比較した推薦応募者への評価、2.高校生活、計画性、競争への志向、規範への態度とホンネとタテマエ、アイデンティティ形成などからみた生徒のさまざまなタイプ、3.将来像、についてみた。そしてそのなかで、

1．推薦応募者は、運動部、生徒会で活躍し、こつこつ努力するタイプと評価されている。ただし気が弱い、英語が不得意、先生に気に入られている、とも思われている。
2．推薦応募者は高校生活で、実際に活躍し、それなりに充実している傾向がみられるが、先生、校則などへはプレッシャーを感じている。
3．推薦応募者は実際に、目標を決めて努力する「こつこつ型」の傾向がある。
4．指定校推薦合格者は一発勝負も人との競いあいも強いと考えており、推薦入試不合格者は両方とも弱い、と考えている。
5．推薦入試合格者は規範に対して従順であるが、そのなかで特に指定校推薦合格者は、ホンネとタテマエを使い分ける傾向がある。
6．指定校推薦合格者は、アイデンティティ危機の体験が少ない。
7．指定校推薦合格者は、明るい将来像を描く傾向がある。

などの、知見を得た。このように推薦入学で大学に入る生徒の特性としては、充実した高校生活、「こつこつ型」などが評価される一方で、ホンネとタテマエの使い分けの傾向などの問題もみられた。いずれにせよ、推薦入試は生徒の特性と深く関連しており、入試結果の生徒への影響もふくめて、今後とも推薦入試と生徒の特性の関係は重要なテーマとなろう。